

## 『ウォールデン』研究：(VI), (VII), (VIII)

上 岡 克 己

(人文学部英文研究室)

### A Study of *Walden* : (VI), (VII), (VIII)

Katsumi KAMIOKA

(Department of English, School of Humanities)

#### 第六章 “Solitude” と “Visitors”

##### I “Solitude” —— 生命の永遠の源泉を求めて

前章の“Sounds”が予期せぬ機械文明の、楽園への侵入のイメージに終始して、聞えて来る音と  
言えば、甘美な自然の音よりはむしろ自然とは異質の、機械の歯車の軋む音の類であった。作者一  
流の言葉の遊戯を使えば、皮肉にも“Sounds”には soundness が全く見られず、Concord ではなく  
discord な世界が展開されたのである。

“Sounds”が音、それももっぱら noise の世界とすれば、“Solitude”は作者が *Journal* の中で度々  
語っている silence の世界に相当する。silence は決して音が欠けている沈黙の状態ではなく、瞑想  
を妨げる文明的夾雑音がないことなのである。それゆえに自然の醸し出す音は心地よく、人を内的  
の世界へと導くことが可能なのである。Thoreau は *A Week* の中で、「Silence は我々が内的に聴く時  
的に聞え、Sound は外的に聴く時に聞える」(*Week*, 391) と語り、*Journal* において silence は、「内  
的な耳に向けて発せられた神性な音……魂の神殿を浸しながら静かにやって来る」(*PJ*, 1:61) も  
のであり、「彼 [沈黙な人] は真・善・美と一体となる (He is one with Truth-Goodness-Beauty.)」  
(*PJ*, 1:63) ことができると語っている。この真・善・美と一体となることの意味は、「真・善・美の天  
上の三揃いの世界」(*PJ*, 1:48) を象徴するがゆえに、神の世界へ参入することである。語り手  
はこの孤独の中、内的に聴こうとする時聞えて来る沈黙の声——神の声——に耳をすます。つまり  
「人間を意識しないことが神を意識すること」(*Week*, 329) なのであり、この時「沈黙は雄弁とな  
る。」(*EEM*, 142) すべてを統一する神の概念を提示し、この孤独の中で自我に目覚める語り手を  
描くことにより、“Solitude”は *Walden* の重要な章と位置づけられ、作品の構造の骨格を形成して  
ゆくことになる。

“Solitude”の冒頭の一節は“Sounds”とは明らかに好対照をなし、Wordsworth のソネット“Evening on Calais Beach”を思わせる。<sup>#1</sup>

快い夕方だ——身体全体が一つの感じになり、すべての毛孔が喜びを吸っている。私は不思議な自在さで自然のうちを行き来し、その一部となっている。涼しく、曇っていて風もあったが、そして、これとって特別に注意を惹くものはなかったが、シャツだけになって石の多い湖岸を歩いていると、すべての風物が常と変わって親しみ深い。牛蛙は鳴き立てて夜を招き入れ、ヨタカの歌は水の上をさざ波立てる風に乗って伝わる。風に騒ぐハンノキやポプラの葉に

共感 (Sympathy) して、殆ど私の息はつまりそうであった。(129)

これは語り手が時計によって定義される人間的時間の枠を超越して、「自然の秩序の一部 (a part of herself)」になりきった瞬間であり、これは物と人の両方から離れた孤独によってのみ可能であった。人間生活からあらゆる非本質的なものを殺ぎ落し、すべての世俗的關係や、時間と空間さえ超越し、自然と渾然一体となり、主客が一つに融合したこのエクスタシーの境地——「見る行為と見られるもの、見る人と光景、主観と客観とが一体」(CW, 2: 160) となる境地——これこそ宇宙の中に身を投じて永遠なるものの一部になろうとする瞬間であった。「この感情、この夢中な喜び、この至福感、全くおのれ自身でその正当さを証明するものである。これが……シーザーの輝かしい勝利よりももっと重要なものであることを知る。」<sup>#2</sup> 語り手が「私はいわば自分自身の太陽、月、星を所有していた」(130) と述べる時、ウォールデン湖畔での観照生活の中で最も望んでいた境地、いわば「神が私達に見せようとした現象や現実」(PJ, 2: 156) であったに違ひなく、まさにこのエクスタシーとエピファニー体験のためにのみウォールデンにやって来たと言っても過言ではあるまい。Rousseau が『孤独な散歩者の夢想』の中でいみじくも語った「この瞬間がいつまでも続けばよい」<sup>#3</sup> といった、このような歓喜の体験が創作の一つの出発点にあったに相違なく、「喜びとエクスタシーの記録を含む本」(J, 4: 223) が書かれることになるのだった。

“Solitude”の冒頭の一節は、ウォールデンの体験を振り返って書かれたに違ひない、1851年7月16日付けの*Journal*の記述と符合する。その中でThoreauは生きている充実感、創造主と共に生きる喜びを赤裸々に告白している。

以前私が成長するのと同じように自然も成長し、自然は私と共に育っていったように思われた。私の人生はエクスタシーであった。(My Life was ecstasy.) 自分の感覚を失う前の若い頃、私は自分が生きていたことを覚えている。……表現し難い、無限のすべてのものを含む神性で天上の喜び、高揚感と拡大感が心の中に入って来る。そのような気持はどうしようもない。私は優れた力 (superior powers) によって扱われているように感じる。これは楽しみでもあり喜びでもあり、今まで獲得したことのなかった存在である。……朝と夕は甘美だった。私は人間社会から離れて暮していた。だれも私の経験したことに気づいていないと思う。同じような体験が他の本にないかと調べてみたが、不思議なことに一冊もなかった。……私を造ったものが私をよくしようとしていたのだった。(The maker of me was improving me.) この介在を見極めた時、深く感動してしまった。……毎日陶酔していたが、だれも節度がないと呼ぶことはできない。すべての科学をもってしても、どのようにどこから光が魂の中に入って来るかは説明できないであろう。(PJ, 3: 305-306)

この創造主との神秘的な一体感の境地は、Emersonが*Nature*の中で語っているような「卑しい自己執着がとれ、一個の透明な眼球となり、一切が見える普遍者となり、神の一部となる」(CW, 1: 10) の境地、換言すれば真・善・美のコスモスが統一された瞬間でもあり、「宇宙の霊と交わりたいという願望」(PJ, 3: 185) の尽きることのないThoreauは、この境地を常に追求めてやまぬのであった。更に付随すれば、Danteが『神曲』の最終部で述べた「たった一瞬の[見神による]忘却が、私にとっては/海神がその影で驚かしたあのアルゴの冒険の/25世紀にもわたるものよりなおずっと大きいのだ」<sup>#4</sup> という境地にも相当しよう。George Pouletも述べているように、「たとえ桁外れにその持続が長く、人間が記憶してきた最も栄光に満ちた企てといえども、時間と忘却にも拘らず人が神を見たことを想起するその瞬間に比較すれば、無に等しい」<sup>#5</sup> のである。Thoreau

は上掲の *Journal* の中で、人間的時間の一瞬において神を捉えており、ウォールデンの洞察者も、後に見るように“Solitude”の半ばで神を把握している。このような意味において、「神を見る、神と直接交わる」ことがウォールデン行きの最大の理由として浮かび上がって来るのである。

その前にThoreauの自然観について整理しておくことは、今後の議論のために有益となるであろう。なぜなら本章に彼の相反する自然観が併置され、漫然と読むことが許されないからである。彼は人間精神を云々する際に自然という視点を重視したが、その際の自然観は必ずしも一貫したものではなく、Perry Miller も述べているように、ロマン派の抱える主要な問題、「対象と内省、事実と真理、緻密な観察と概念との微妙なバランス」<sup>16</sup> 同様、苦悩しなければならなかった問題の一つであった。*Walden* はしばしば変身・再生の物語と解釈され、それはそれで正しいのだが、楽天的な語り手の単なるスタティックな変身物語ではなく、多くのディレンマや葛藤を経て変身・再生する物語であることを忘れてはならない。そのディレンマや葛藤の一つが自然観の中に見出されるのである。

先に引用した“Solitude”の冒頭の一節は、「共感 (sympathy)」という言葉に代表されるようにThoreauの自然観を最もよく示すところである。また同様に引用した*Journal*の最後に登場する「科学 (science)」を抜きにしても、彼の自然観を語ることは不可能である。つまり彼は自然に対して二つの全く異なったアプローチを試みる。あえて前者を詩的自然観、後者を科学的自然観と呼ぶことにすれば、この二つの自然観の葛藤は後に見る「善」と「野生」の葛藤同様に、作者Thoreauにとって自らの存在理由を根底から揺るがしかねない危険なものであった。*Walden* は語り手のオプティミスティックな、きれい事を並べた回想録では決してなく、むしろ彼が多くの悩ましい問題に直面し、真摯に解決を計ろうとするその努力の姿勢がこの作品を貫いているのであり、読者は神としての語り手ではなく同じ同胞としての語り手に共鳴するのである。

「共感」をもって自然を眺める姿勢が詩人独特のものであることは、例えば“Walking”の中、「周囲の自然と共感して、毎年真面目な読者のために彼等なりの花を咲かせ実を結ぶ——そういう言葉を生み出す人、それが詩人というものなのである」(Wr, 5: 232) という一節からも理解されよう。一方科学的自然観というのは、人間的な感情を一切抜きにした自然の客観的分析、分類や記録を主とする。このアレゴリカルな例はHawthorneの作品、“The Birthmark”のAylmer、“Rapaccini's Daughter”のRapaccini、そして *The Scarlet Letter* のChillingworthに顕著に見られる。Thoreau自身がナチュラリストとして自然を観察する場合も、この科学的自然観を抜きにしては考えられない。なぜ彼が必死になって自然の事実の収集、分析、分類に狂奔していたかといえば、「自然を研究することが、とりもなおさず自分自身を無限に完成してゆく」<sup>17</sup> ことだからであり、「全体的な人間」を望むのなら、客観的な科学と主観的洞察は車の両輪のようなものでなくてはならなかったのである。

しかし自然をよく知ろうとした、いわば積極的な科学的姿勢が、時として裏目にでてくることがある。なぜなら自然には科学的客観的分析と呼ばれるものに馴染まないものを多く含んでいるからであり、真理は科学的分析だけでは得られないからである。ましてや観察を行う人間には、「科学が関与せず、科学の洞察とて何ら貢献しない意識の状態」<sup>18</sup> が存在するのである。Thoreauは1850年代を通して科学に対する疑念を露骨にする。「私の知識の性格が年々より正確に科学的になり……顕微鏡の視野にまで狭められているのではないか。詳細を見て、全体や全体の影を見ていないのである」(PJ, 3: 380)、「以前は自然の一部であったが、今では自然を観察しているだけだ」(J, 3: 378)、「私は悲しいほど科学的になっている。」(C, 283) これらの嘆きの背後には、皮肉にも彼が科学に染まっていたことを決定的に裏付けるものでもあった。

確かに客観的な事実重視の姿勢は“Economy”の中に明確に読み取れ、1850年以降 *Journal* の主流は彼の内省的な冥想よりはむしろ自然の客観的な「ナチュラリストのデータ」<sup>9</sup> と呼ばれる類のものであったことは否定できない。彼としては自然のリズムや秩序をよりよく知り、よりよい自然との関係を構築したいがために採用したアプローチなのであったが、皮肉なことに過度の思い入れはかえって真理との距離を遠去ける結果に至ったのである。科学的真理だけでは人間の真理を読み取ることができないと悟った彼は、「事実以外の何かあるもの」(J, 3: 99) へと目を向けなければならなかったのであった。

確かに科学は客観的な事実を教えてくれるので一定の評価はできよう。しかし科学的精神の根本的な欠陥は、「自然を死んだ言語として研究する」(J, 5: 135) ことにあり、個々の事実のみを尊重し、個々の事実が相互に関連しあう全体の意味を解釈しようとしないうことである。人は自然の諸事実が人間も含めていかに有機的に関わっているかを学ぶべきであり、実際 *Walden*こそがそのような世界を描いているのである。このような有機的、全体的な見方は、洞察者としての語り手が最終的に到達する境地であり、「全体的な人間」という概念が *Walden* 解釈上最も重要なものとして浮上する。最もこの「全体性」には、「愛情とか、理性とか、完成と超越への衝動とかという、人格の内側の統合的諸要素が優先」<sup>10</sup> するのは言うまでもないことである。

Thoreau は *Journal* の中で「どのような学問分野に特に興味がありますか」という学術振興会からの質問に答えて、「より高い法則を扱う学問」であり、「私は神秘主義者、超越主義者、その上自然哲学者である。……私と自然との関係を正確に語れば、彼らの嘲笑を買うだけだろう」と述べる。更に続けて「Plato や Aristotle が会長である協会の幹事からの問い合わせであれば、私は躊躇せず詳しく自分の研究を語っていただろうに」(J, 5: 4-5) と述べ、彼の立場が普通の意味でのナチュラリスト＝科学者ではなく、McIntosh の言葉を借りれば“romantic naturalist”であることを鮮明にする。Worster が次のように述べる時、それは傾聴に値しよう。「Thoreau のようなロマン主義者達が好んで使った『愛』とか『共感』に基礎づけられない真の理解などはありえないのである。愛とは相互依存の認識であり、精神と物質との間の『完全な対応』の認識である。共感とはすべての存在を単一の有機体に結びつけている同一性ないしは類似性の絆を強く感じ取る能力である。このような道を通じて自然に近づかないようなナチュラリストは、確信をもって真実を語ることでできはしない。それどころかこのようなナチュラリストは、魂と世界との道徳的な統一を破壊していることにつながるのである。」<sup>11</sup>

とはいえ客観的事実が全く無に帰するわけではない。科学的自然観で捉えた自然の事実が倫理的要素を加味された時、彼の科学の存在意義がある。要は客観的事実をいかに主観的真理に変えるかであり、「純粋に客観的な観察というのはいずれ、興味があり意義があるためには主観的でなければならぬ」(J, 6: 236-237) ものなのである。Thoreau にとって「大切なのは事実ではなく、事実がこちらの精神に与える印象、あるいは効果である」(Wr, 1: xxx) のだった。

第16章“The Pond in Winter”では、客観的に得られた事実が作者の意識のフィルターを通して濾過され、主観的な真理として現れる。この章で彼は湖の詳しい測量をしてデータをだし、緻密ともいえる湖の地図を作成している。この際の彼の姿勢は客観的な分析を試みる科学者のそれと同じである。しかし彼が湖の地図を *Walden* に載せた最終的な意図は、決して測量の正確さを自慢することでも、湖底を突きとめることでもなく、客観的事実から敷衍される倫理的側面にあった——「私が湖について観察したことは倫理においても同様に真実であるといえる。」(291) ここにおいて自然の法則は人間の法則と一致するのであった。

自然の中にこのような倫理的要素を見出そうとする、愛とか共感を中心にした詩的自然観から必然的に「関係 (relation)」という、*Walden* にも頻出する重要な概念が導き出される。Emerson は

“Beauty”の中で、鳥類学者の研究は「共感が足りないために退屈な辞書にすぎなくなり、彼の研究成果は死んだ鳥である。鳥はその重さや大きさにあるのではなく、自然との関係にある」(CE, 6: 281, 傍点筆者)と述べ、Thoreau自身も“Higher Laws”において、「[解剖して分析するよりも]もっとすぐれた鳥類学の研究方法がある」(212)と述べているがごとく、この関係を見抜く洞察力は、もはや科学的ではなく研ぎ澄まされた感性の持主である詩人のみに与えられているのである。それゆえ「詩人の言葉は物事のコアを衝く」(PJ, 1:338)のである。Thoreauは後年の*Journal*の中で「関係」について次のように述べている。

本当に私に関心があるものはそこにあるのではなく、それと私との関係である。……科学者は次のような誤りを犯し、多くの人々も科学者と同じである。すなわち、現象を自分とは無関係の独立したものとして冷やかに見ているのである。重要な事実、それが私に与える影響である。……私に関心があるのは洞察の対象、真理のみである。虹などを説明する当の哲学者ですら決して虹などを見ていなかった。そのような対象に関して、私に関心があるのは(哲学者が取り扱う)ものではない。関心の中心は、私とそれらのものとの間のどこかにある……(J, 10: 164-165)

思惟と対象、見るもの「私」と見られるもの「自然」を別々に扱うことは洞察者には許されない。なぜなら「主体と客体とは共に実在し、どちらか一方を省略することは部分的に盲目に等しいからである。唯一の真理はそれらの間の関係を見出すことにある」<sup>12</sup>なのであった。例えば上記の引用の中にある虹を考えてみれば、虹は科学的に空中に浮遊する細かい水の粒子が、プリズムの働きをして太陽光線を分光したものと定義される。この定義からは人間の感覚の誤謬が取り除かれた、物理学的な客観的事実が列挙されているだけである。だがこれではKeatsが「かつて天にはすばらしい虹がかかっていた……[今や]虹はありきたりな事物の退屈な一要素に収められてしまった」<sup>13</sup>と嘆くのも無理はない。Thoreauにとって重要なのは、虹そのものの客観的事実よりもむしろ虹が人の心に与える影響——「人と虹の関係」——なのである。「いわゆる我々の科学は、我々の共感よりも不毛で誤りに満ちている」(J, 13: 169)と述べているがごとく、真理は「私と自然との関係」(J, 5: 5)の中にあるのであった。ThoreauやGoetheにとって虹は神の顕現を意味した。Goetheが自らの『色彩論』の中で強調していたことはThoreauにも十分あてはまる。Goetheの『色彩論』とは、「光を解剖する学ではなく、色彩という経験的な事象を直観し、系統づけようとする現象の学」<sup>14</sup>だからである。このように見てくると、「自然は何のために存在するのか」という本質な疑問に対しても答えは容易に想像がつく。Thoreauにとって自然を観察することは、「神性に満ち溢れている」(J, 8: 88)自然の事実が内包している精神的意義を洞察することであり、最終的に「自然の中に神を見出すこと」(J, 2: 472)に尽きるのである。RousseauやGoetheが自然研究に関心を抱いていたのは、ひとえに自然の神々しい本質のためであった。自然を探求することは、とりもなおさず神に向かって「自分自身を無限に完成してゆく」ことになるので、彼にとっては極めて重要な過程だったのである。とはいえこのような達観の境地に辿り着くまでには多くの困難を克服せねばならなかった。その一つに自然の二面性——友好的な自然と残酷な自然——があり、“Higher Laws”の「善と野生」の葛藤と同様彼を苦しめたものである。これについては後で詳しく言及することになる。

Thoreauが「自然を愛するのは、一つには自然が人間ではなく、人間から離れているからである。人間のいかなる制度や支配も自然に浸透することはない。そこには違った正義が支配する。……もしこの世が人間ばかりであったなら、背伸びもできないし、希望をすべて失うことになる」(J, 4:

445) からである。孤独とは“Economy”の中で言及された文明社会のアンチテーゼとしての世界——非自己の圧迫から脱却できる唯一の空間——であることは疑いない。ただし孤独は人と人との単なる物理的距離によって得られるものではない。なぜなら「私はいくら脚を運んでも二つの心をお互いによりよく近く寄せることはできない」(133) からであり、「孤独とは人とその仲間を隔てる空間の距離によって計算されるものではない」(135) からである。語り手の孤独は主体的な孤独であって、多くの人々がベシミズムやニヒリズムゆえに追いやられる孤立感とは全く異質のものである。

では孤独は何の存在意義があるのだろうか。その一つは、憂鬱に対する健康的な世界に至る道を暗示することであり、第二に「私は神から確固とした保証と安全を得……特別に導かれ守られている」(131) という確信を得たことである。特に後者の確信が本章において重要となる。“Economy”の最初でも述べられた「あんなところには、寂しくて人間のそばに来たいとお思になることでしょう——ことに雨や雪の降る日や夜などは」(133)、更には「どのようにして世の中の楽しみのそんなに多くを捨てる気になったのか」(133) というような類の愚問は別にして、「あなたは一番何の近くに住みたいと思いますか」(133) という質問には、柳が水のそばに立ち、その方向に根を伸ばすように、「生命の永遠の源泉 (the perennial source of our life)」(133) の近くに住みたいと答える。語り手の言う「生命の永遠の源泉」とは、柳の例にあるように四大の一つである「水」のことなのだろうか。確かに自然という視点をもつことによって人間精神の問題を解明できたという意味で、自然は彼の最大の心の支えであった。このような自然と調和した生活を送ることこそ、ウォールデンで意図した最大の目的の一つであり、実際ウォールデンの自然によって精神的にも肉体的にも再生が仄めかされ、彼の求めるコスモスの世界が実現されたように思われた。しかし作者が *Walden* を通して最終的に言わんとしているのは、後述するように自然すらも人間の成長にとっては一過程にすぎず、「自然は征服し難いが、征服しなければならない」(221)、あるいは「自然を通して、自然を越えて見なければならぬ」(*J*, 5: 45) ことである。Anderson が述べているように、「自然は Thoreau のゴールではなく、ゴールに到達する手段にすぎなかった」<sup>15</sup> のである。彼がひたすら求めているのは、自然を越えた世界、換言すれば神の世界に他ならなかった。神の問題を抜きにして *Walden* を語ることはできない。*Walden* は「神に対する記憶に値する讃歌 (memorable praise of God)」(78) を目指したものであり、「人間の神性を語れ!」(7)、あるいは「天国を語れ!」(200) が、いやがおうでも *Walden* の主題を決定づけるのである。“Solitude”の後半部分ではまさにこの「生命の永遠の源泉」の探求に焦点が当てられ、それまでの孤独論から神の世界へと読者は導かれるのである。

“Solitude”の後半から語り手は本章の核心に迫り、今までの主流であった文明批評や自然観察から多層的なストーリーを展開し始める。“Solitude”の意義は三つある。それは神と自然と人間の再発見でもあった。第一は自然の中に永続的で不変的なものを探求しているうちに、「我々のすぐそばには最も偉大な法則が不断に行われつつある」(134)、すなわち神の存在を再認識したことである。第二は、「我々人間は私にとって少なからず興味のある実験の主題である」(134) と述べられているように、自己探求の主題が明確にされたことである。第三は、「我々は全面的に自然の中に巻きこまれるわけではない」(135) とあるように、自然の二面性を確認したことである。“Solitude”の冒頭で紹介された自然の中のエクスタシーの境地と共に、いわば自然からの疎外感とも受け取れる境地を認識したことであり、ここには作者の自然に対する両義的な感情が含まれている。

孤独の中、「外界の事物が我々から落ち去り、消え去って行く。」<sup>16</sup> 一切のアピランスは取り除かれ、「私の必要に関する限りでは、最も上質の沈澱物のみが私の周囲に積み寄せられた」(144) のである。語り手は周囲を見渡すと、宇宙を創成し万物に生命と秩序を与えている存在に気がつく。

彼が「生命の永遠の源泉」の近くに住みたいと語る時、彼の真意は次の一節に明確に要約されている——「すべてのものに一番近くあるものは、それらのものを造ったあの力 (that power) である。我々のすぐそばには最も偉大な法則 (the grandest laws) が不断に行われつつある。我々のすぐそばにあるものは、我々が話しこむことが大好きな、我々が雇った働き手ではなく、その作品が我々である、その働き手 (the workman) である。」(134) ここで言及された「あの力」とか「その働き手」が、宇宙を動かし、すべてのものに生命を与え育む遍在者、自然の経済を設計管理し、秩序と調和ある世界を創造した至高の存在としての創造主＝神を暗示していることに今や疑問の余地はないであろう。

神こそ多様な世界の背後にいて、すべての存在を統一し、「真・善・美という永遠の三位一体」(CE, 1: 354) の中心的象徴である。Walden を通して「一にして多」、「多にして一」なる自然の様々な世界が展開されるが、この中で語り手が必死になってコスモス像を探求して行く過程で究極的に行き着く所は神の世界をおいて他には考えられない。それを典型的に示している箇所は、Walden の中心に位置する“The Ponds”の中の詩の一節、「ウォールデンのそばに住んでいる時こそ／私は最も神と天国に近づくことができる」(193) であろう。神とは「中心が至る所にあり、周囲がどこにもない球体」<sup>#17</sup>であり、「あらゆる瞬間とあらゆる場所において神はすべての瞬間とすべての場所の中心となっている。」<sup>#18</sup> 純粋な魂が神を求めるのは、「魂そのものの内面に生じる求心的な運動」<sup>#19</sup>のためであり、人は自らの魂を純粋に保てば保つほど、神に近づくことが可能なのであった。

語り手は Walden 中頻出する超自然的な存在について慎重に言葉を選びながら言及している。例えば an old settler and original proprietor (137), an elderly dame (137), Eternal Justice (173), ancient settler (182), Maker (193), Good Genius (207), Creator (207), Omnipresent Supreme Being (217), the manager of this gallery (240), Brahmin (298), Artist (306), The Maker of this earth (308), Artificer of things (314), a higher order of being (324), the Builder of the universe (329), Benefactor and Intelligence (332) なのである。これらの存在は「アリストテレスの語るエンテレケイア、ライブニッツの单子、シェリングの靈魂、ゲーテのデモーニッシュに相当する存在であり、これこそは万物を生み出し、形成し、変形する神、大いなる自然をつくる神に他ならない。」<sup>#20</sup> であろう。

注目すべきは、神に関する言及が“Solitude”に始まり、“Spring”, “Conclusion”に向かうにつれてその数を増していることである。これはとりもなおさず「我々に先立つすべての世代は面と向かって神と自然を直視した」(CW, 1: 7) のに対し、現在における神の不在を逆説的に問うことにつながる。「科学が神に代わって人々を導く概念となり」<sup>#21</sup>、神を直視することがなくなった現代人に神を意識させ、人間に秘められた神性の復活こそ彼が最も人々に期待するところのものであった。もし人間が「神のイメージで造られた」(PJ, 3: 230) とするなら、それに恥じない態度が要求される。「Walden における Thoreau のテーマは、人間生活の神的な可能性」<sup>#22</sup>の探求にあったことは間違いなく、作者の好む言葉 divine, divinity が多用されていることからそれは裏付けられ、最終的に神を受け入れる人間の魂の問題の有様が問われることになるのであった。

“Solitude”の後半で、語り手は「ウォールデン湖を掘り、石で固め、その縁に松の林をめぐらしたと伝えられる、ある昔の入植者で最初の所有者」(137) の訪問を受けたことや、「大概の人には姿が見えない、いい年をした老婦人……の寓話に耳を傾けた」(137) と述べる時、彼はだれにも邪魔されぬ孤独の中でこそ享受できる神との一対一の関係を心から味わうのである。第14章“The Former Inhabitants; and Winter Visitors”では、「隠者 [Thoreau] と哲学者 [Alcott], そして前にうわさした古くからの入植者」(270) 三人が冬の夜の更けるのも忘れて「神話を改訂したり、寓話のそここを磨き上げたり、地上に恰好な土台が見あたらない空中楼閣を建てたりした」(269—

270)とあり、読者に神との関係を再認識させる機会を与えている。Sherman Paulも述べているように、「宇宙と独自の関係を結ぼうとすることは、神と直接交わろうとすることと同じであり、超越主義者のリアリティー願望も神の願望と同じであった」<sup>#23</sup>のである。

このように「神」が *Walden* の重要な主題の一つであることに疑問の余地はなからうが、Thoreauはこの作品の中で神との関係だけを描くのではなかった。なぜなら「人生のすべての義務は、いかに呼吸するかと同時にいかに高き想いを維持するかという問題に集約される (The whole duty of our life is contained in the question how to respire and aspire both at once.)」(*PJ*, 1: 348) からである。彼の関心は「天上的なもの (celestial)」と「地上的なもの (terrestrial)」の両方の世界に向けられていた。語り手は『中庸』を引用し、「天と地の微妙な力の影響はいかに広大で深遠なものだろう」、「我々はそれを認めようと欲するが、我々はそれを見ていない。それを聞こうと欲するが聞かない。事物の本質と合体していて離すことは出来ない。」「この力は、人をして宇宙のうちにあってその心を浄めて神聖化し、晴れ着にあらためてその祖先に犠牲と供え物とを捧げしめる。それは微妙な知恵の大海である。それらは至る所に、我々の上に左に右にある。それらはあらゆる側において我々を取り囲む」(134)と述べて、「天と地」の両方を評価する姿勢をとる。実際“The Former Inhabitants; and Winter Visitors”においてAlcottが高く評価される理由は、彼の中で「天と地が合致する」(269)からに他ならない。このように作者にとって「天と地」の両方が関心事であり、「自然と神の両方に受け入れられる均衡のとれた生活をする人が最も幸福な人である」(*C*, 247)と述べているように、「天と地」の均衡を維持しようとする姿勢が *Walden* の中に顕著に見られる。このような人物の典型が作者の操るバルソナとしての語り手であり、本書で取り上げた「全体的な人間」とは、まさにそうした人間のヴィジョンのことなのである。*Walden* は過去のエクスタシーの記録ではなく、統一された人間像としての「全体的な人間」でありたいとするThoreauの願望の書なのである。ともかく“Solitude”で神の概念を登場させたことで、*Walden* は単なる自叙伝的な生活体験のストーリーという枠組から離れて一層普遍性を帯び始めたことになり、重大な主題上の転換点を迎えるに至ったのであった。主題上の転換は、自己発見としてのアイデンティティー探求についても言えることである。そもそも「神を信ずることは……自らの自我に戻ることには他ならなく」(*PJ*, 1: 235) 神を直視することは自己のうちに神を見ることであり、同時に神のうちに自己を見ることでもあるので、神と自己の問題は相互に関連し合っているのである。神の言及に続いて語り手が「我々人間は私にとって少なからず興味ある実験の主題である」(134)と語る時、人間が主たる対象として取り上げられることになる。実際のところ *Walden* の第一稿には神の言及と共に自己探求の問題は見出せないのが、自己探求の主題はウォールデンでの生活の最初から意図されたものではなく、おそらく湖を去って *Walden* が出版されるまでの7年間、内省に内省を重ねた推敲中に作者が必然的に遭遇する問題であり、これからの *Walden* の構造を左右する最も重要な主題となってゆくことになる。

語り手は静謐極まる孤独の中、自分自身という存在について思索冥想しているうちに、実際の自己と、彼が「見物人」と呼ぶもう一人の批評する存在との「二重性 (doubleness)」に気がつく。これに言及する“Solitude”の次の一節は、自然に対する彼のアンビヴァレントな姿勢と共に重要となる。

考えていると、我々は正気でも時には変になってくる。精神の意識的努力によって我々は行動とその結果から超然と立つことができ、すべての事物は善も悪も流れのごとく我々を過ぎて行く。我々は全面的に自然の中に巻き込まれるわけではない。私は流れの中の流木でもありうるし、天にあってそれを見おろしているインドラ [ヴェーダ神話に見える雷霆の神] でもあり

うる。私は劇場の出し物に感動することもあれば、遥かに関係が深そうに思われる実際の事件には感動しないこともある。私は私自身を人間的存在としてのみ知っている。いわば思考と感動の舞台として。私は他人と同じように自分自身から離れて立つある二重性を自覚している。私の経験がいかほど強烈であろうとも、私は私の一部でありながら私の一部ではないがごとく、経験を共有しないが注目するところの、私でもなくあなたでもない見物人の存在し批評するのを自覚する。人生の劇——それは悲劇かもしれない——が終わるとその見物人は行ってしまふ。それは彼に関する限りでは一種のこしらえ事であり、単に想像の作品にすぎないものであった。この二重性は我々を容易に頼りない隣人や友人にすることが往々にしてありうるのである。(134-135)

ここで言及された「私の一部でありながら私の一部ではないがごとく……存在し批評しつつある見物人」とは、自我を監視する無意識的良心、すなわちスーパーエゴのことである。この一節は、今まで第一人称「私」の存在を声を限りに、やや楽観的とも思えるほど叫んできた作者が、ここに至って初めて無意識の存在に一瞬戸惑い、一抹の不安と動揺を見せた箇所であると読み取ることができる。意識的にのみ自己を知る者にとって無意識の世界は本能的に恐怖である。第16章“The Pond in Winter”の冒頭の一節——「静かな冬の夜の後で、私は何が——いかにして——いつ——どこで——といったような質問を受け、眠りの中で何とか答えようとしたが答えられなかったという印象をもって目覚めた」(282)——において、語り手は無意識が意識下に投影されたものとしての夢に対して懸念を表明している。作者Thoreauのような極度のモラリストにしても、現実には完全な善の実践は不可能であり、その裏返しとしての不安や恐怖が無意識の中に蓄積され、夢として放出されるのであった。GozziやLebeauxなどの精神分析的アプローチを駆使する批評家は、エディップス・コンプレックスや罪悪感をそこに読み取っている。

しかし一方では無意識的良心が自らの生に積極的役割を果たすこともある。それはかつてShillerが「個人の人間はそれぞれの身内に、潜在的かつ先験的に一人の理想的人間、いわば人間の原型を所有していると言ってよいだろう。とすれば、不断に変化してやまぬ自我の現象を通して、この不変の理想の統一体と調和合体することこそめいめいの一生の仕事だ」<sup>24</sup>と語ったこと、あるいはMatthew Arnoldが「最善の自我」と呼んだものに違いない。我々の内にある「理想的人間」あるいは「最善の自我」を追求すれば追求するほど、現実の自己との乖離——二重性——を認識せざるをえなくなるのが必定である。Thoreauは現実の自己体験が限られたものであることを悟り、Waldenでは自ら創り出したペルソナとしての語り手に、自らにない属性を賦与しようと試みた。それゆえに虚構化された文学作品の中に生きるペルソナには、永遠の生命が与えられ、作者の想像力のなすがままに自由に飛翔することが可能となったのである。

文学作品の中に自己の理想的姿を投影すること——最終的には“Conclusion”に登場するクルーの芸術家像に集約される——により、作者の魂は和らげられ、Waldenを書くという行為そのものが作者の生きるべき存在証明となっていたのであった。自己の中の理想的姿とは、最終的に作者がしばしば語る「神性」と同義であり、自己の中の「神」そのものなのである。したがって神から見れば人の一生など「一種のつくりごとであり、想像の作品にすぎなく」、多くの人々にとって神は「歓迎されない隣人であり友人である」のであった。しかし一旦心の中の神を意識した以上、それに背くことは許されず、むしろそれに近づくことが、ウォールデン湖が神の属性の多くを内包しているとすればそれにはできるだけ近づこうとする努力が必要となる。「自己認識によって魂は神のような性格を取り戻す」<sup>25</sup>ことが可能なのであるから、最終的にウォールデンの洞察者は、小宇宙としての自己を完成することを通して神の世界へ参入することが許されるのであった。

“Solitude”の第三の意義は、Thoreauの自然に対する両義的感情が見られることである。それは「我々は自然の中に全面的に巻き込まれているわけではない」という一文に典型的に示されているように、既に見た本章の冒頭の「共感」を中心とする自己充足的な自然観とは明かにニュアンスを異にしていることである。それは絶対的な信頼をおいていた自然に対し、懐疑の念を表明したことでもあり、自然に対してある程度の距離を保った新しい見方であった。この背景にはウォールデン滞在中、及びその後幾度となく訪れたメインの森やコッド岬で、原始の自然に直接触れたことと無関係ではあるまい。実際カターディン山頂では決定的な衝撃、生まれて初めて自然の脅威を感じたのであった。

ここには……「混沌」と「闇の夜」から造られた地球があった。ここには人間の庭園はなく、創造が祝われたこともない大地があった。……これは広大で恐ろしい「物質」であり、我々が聞いている「母なる大地」ではなく、人間がその上を歩く所でも、その中に埋められている所でもなく——実際その上に身体を横たえることですら厚かましかった——これは「必然」と「運命」の家であった。ここでは人間に対して親切にしなければならないような義理もない力の存在が感じられた。(MW, 70)

これは今まで述べてきた詩的自然観と科学的自然観の相違とは別の、Thoreauのもっと本質的な自然に対する姿勢の変化を秘めているものであり、突き詰めてゆけば我々の抱いているThoreauの宇宙観の根幹に関わる大きな変化である。なぜ自らが高く評価してやまぬ自然に完全に溶け込むことができなくなったのか？これは彼の思考過程の中に、完全で調和的、友好的な自然とは別種の、不完全で混沌とした敵対的自然——ダーウィニズムの現実——に対するヴィジョンが欠落していたために生じた問題であり、これから先、誕生や創造に見られる自然のコスモスに対する信頼と、破壊や死に見られる自然のカオスに対する恐怖が彼の心の中で互いに反発しながら同居することになる。これゆえにMcIntoshを初めとして多くの批評家が、「Waldenには自然に関して明らかに矛盾する言及がある。それは彼の自然に対する複雑な感情を示したものである。」<sup>26</sup>と指摘するのは当然といえる。

確かに自然界はその完全さにおいては人間界と比べるべくもないが、この完全で調和的だと思われた自然もその多様性ゆえに時として混沌とした現象、「自然の混乱と不規則性」(290)を展開する。後の“The Ponds”で描かれたウォールデン湖は自然の完璧さの象徴であるが、そのウォールデン湖を取り巻く自然の中にはとても「神性」の表象とは受取れない、幾つかの否定的事実が見出される。これはWaldenの描写では本格的な議論の対象とはなりえなかったが、例えば“Brute Neighbors”における蟻の戦争、“Spring”に見られる弱肉強食の世界、いや実際のところ、既に引用した本章の冒頭の一節の最後にさえ、「最も野性的な動物は休息もせずに今もえじきを求めている」(129, 傍点筆者)と明確に醜い自然が描かれているのであった。とはいえThoreauにとってはこれらは決して醜い自然ではなく、むしろ活力と生命力に満ちた本当の自然の姿だったのである。

これらの例で強調されているのは「野生(wildness)」の概念であり、今まで主張してきた自然の神性、善性とは明らかに矛盾し、「自然に対して分裂した態度」<sup>27</sup>をとっているように思われる。自然界は彼が純粋さを望むという意味では純粋ではありえず、調和的な世界像の構築という夢は危機を迎えることになる。しかし自然を徹底的に探求してゆけば、自然の二面性は最終的に落ち着く結果であったともいえるし、最初にも述べたように、「天上的なものと地上的なもの」の均衡をとることが、「全体的な人間」に課せられた大きな責務となるのであった。

自然のdoublenessにより、Thoreauの理想とした外的自然と内的自然の完全な一致は事実上不

可能となり、彼は自らの生きるモデルとして「不完全でありきたりの自然界——とりわけ科学によって明らかにされたような自然界——のかなたに、高度な理性ないしは直観的な世界を探求」<sup>28</sup>するようになった。もっともそうだからといって、前にも述べたように Thoreau の関心は Heaven だけにあるのではなく、Earth にも限りない愛着を抱いていたのだ。他の超越主義者がややもすれば「この不満な世界から目を上にばかり向けていた」<sup>29</sup>中で、彼は「天と地」の両方の世界をこよなく愛すのであった。ここに超越主義者としての彼の独自性が見出される。

たとえ自然が敵対し、残忍な事実がそこに見出されたとしても、それには何かの理由があつたことである。彼は *Walden* ではそこまで具体的に突っこんで追求しなかったが、*Walden* 出版以後一層科学的となり、自然の秩序を解明する膨大なデータを書き留めるに至った。もっともすべての自然を知り尽くすことは人間の一生をもってしても不可能なことであり、Thoreau が一応の結論として *Walden* の中で導き出したものは、自然の再生のメカニズムであった。これは人間の再生のアナロジーとして *Walden* の中で十分に活かされ成功したが、考えてみればこれは自然界の一部の現象、とりわけ植物にあてはまる現象にすぎなく、自然がすべて解明されたことにはならないのである。ここに、より大きな視点が必要となってくる。Thoreau 自身も“Spring”の中で指摘しているように、自然が有機的であるという考え方が自然の doubleness をよく説明する。「あらゆる経験は一つの見地から捉えるにはあまりに複雑であると同時に、あらゆる外面上の矛盾はより大きな有機的統一 (organic unity) の中で最終的に解決可能である」<sup>30</sup>ことに彼は気づくのであった。

自然の doubleness と自己の doubleness について一抹の不安を感じながらも、ウォールデン湖畔に住む語り手は自ら去ったコンコードの社会と比較しておおむね満足していた。「私は社会という諸々の川の流れ込む、孤独という大海の奥深くに引っ込んでいたので、概して言えば、私の必要に関する限りでは最も上質の沈澱物が私の周囲に積み重ねられた」(144) と述べているように、孤独という状況は、あらゆる見せかけの関係を遮断できるので、真に本質的なものに触れ、実相のみ確認できる点で最も好ましい状況だったと言える。孤独の世界はシンプリシティの世界と共通する。簡素さと孤独の中でこそ、作者が追求してやまぬコスモスの世界が見出され、そこに住む価値のある完全な人間が暗示される。Thoreau は *Journal* の中で孤独の真髓について次のように述べている。

君は私が人々から遠去かることによって自分自身を貶めていると考えるかもしれないが、孤独の中の私は絹の織物、すなわち堅い皮 (*chrysalis*) を身に纏い、妖精のように間もなくより高い社会に相応しい、一層完全な創造物 (a more perfect creature) となって飛び出して行くのだ。普通貧乏と呼ばれている簡素さによって、私の人生は凝縮し、以前は無機的で塊にすぎなかったが、今や私は有機物、すなわちコスモス (*κοσμος*) となるのである。

(*J*, 9 : 246-247)

語り手が「大部分の時を孤独で過すのが健全であることを知った。最も善い人でも一緒にいるとやがて退屈になり散漫になる。私は独りでいることを愛する。私は孤独ほどつき合いよい仲間をもったことがない」(135)、あるいは「つき合いは通常あまりにも安価である」(136) と語るに及んで、読者は彼が人間嫌いになってしまったのではないかと錯覚する。多少の誇張癖は彼にはつきものだが、彼にしてみれば、物を見る洞察者 (seer) になるためには上の *Journal* にもあるように、一旦は人間を離れた孤独の世界に身を置かねばならなかったのであった。

“Solitude” の中で見出した神が自己探求とあいまって *Walden* の主流になっていった。一方自然観の方はすぐさまダーウィニズムの自然観に進まなくても、自然に対する楽観的な態度を幾分修正

する方向に進んでいった。もっとも語り手があえて目を背けたくなるような「人間と自然の関係」を公にしたことが重要であり、この姿勢は後の第11章“Higher Laws”においても、できれば避けたい自己の肉体の問題を扱う際にもあてはまる。このような困難な問題を徹底的に吟味し、真理を探求してやまぬ語り手の真摯な姿勢に、読者はウォールデンの洞察者として相応しい、信頼できるペルソナであることを今さらながら再認識させられるのであった。*Walden* という作品は単なる語り手の文明批評でも自然観察の記録でもなく、彼自身を取り巻く多くの葛藤やディレンマを通して「全体的人間」へと変身する物語であると定義するのが正しい道であるように思われる。

## II

### “Visitors”：簡素な生活と高き想い——二つの異なる森の生活

前章の最後の一節では「神々と人間とを青春の活力によみがえらす力をもった」(139) 女神Hebeが登場し、有限の人間界を越えた神話的世界が暗示されたが、“Visitors”では場面は再度現実の湖畔生活のディーテイルに戻ってゆく。語り手は前章で孤独を殊更強調したが、それが唯一絶対の世界ではないことは、本章を初めとする現実の世界の描写が繰り返されていることから明白である。それは必ずしも作者が隣り合った章のコントラストを意識していただけではなく、自然の枠組と人間社会の枠組の接点にいて、同時に神の世界をにらみながら天と地の均衡ある生活を送ろうとしたからに他ならず、再度 *Journal* の一節を引用すれば、「人生のすべての義務は、いかに呼吸するかと同時にいかに高き想いをもつか」の姿勢を貫こうとしたからであった。彼はいわゆる double vision をもって精神的世界と物質的世界の両方に関心を向けていたのである。Thoreau は *Walden* を語り手一人の虚構のユートピアにするつもりは毛頭なかったのである。彼にとって「完全な状態」とは、彼の中で魂と肉体、自然と文明、詩と科学、孤独と社会、その他多くの二元的な世界の均衡がとれた状態を意味し、彼自身この均衡のとれた状態を常に追い求めていたのだった。

冒頭、「私は自分が大概の人に劣らず社交を愛し、私と行き合うどんな血気盛んな人間を向うにまわしてもその場は蛭のようにねばることをも辞さない者だと考えている。私は元来隠遁者ではなく、そっちの方に用さえあれば、酒場の最も剛の者の御常連をも降参させるほど根を据えることもありうる」(140) と述べ、厳粛な雰囲気 of “Solitude” のトーンと比べてその表現はコミカルでさえある。“Solitude” の荘厳さから一転“Visitors”の軽妙でユーモアに富むコミカルな口調への変容は、他にも時々見かけられる *Walden* の文体上の重要な特徴の一つであった。ユーモアにより過度の説教臭さや緊張感が幾分和らげられ、読者にはこの語り手が遠い人のように見えて実は同じヤンキーの一人であるという親近感を覚え、先へ読み進むようにと励まされるのである。

確かにこのように *Walden* に喜劇的要素を認めることが出来るが、Galligan の言うように語り手をただちにコメディアンとみなす<sup>#31</sup> のは、さすがに性急な感じがする。むしろ作者は心憎いほど二極対立世界のバランスを考慮しながら論を進めている——それに伴って文体も変化する——ことに注意すべきであり、作者の狙いはあくまでも読者の覚醒にあるのであった。

とはいえ *Walden* のユーモアについては、その文体上の特徴から一考する価値は十分にあるように思われる。Thoreau 自身“Thomas Carlyle and His Work”の中で、「特に超越主義的哲学を明晰にし、消化できるようにするためにはユーモアの要素が必要である。……すべての不完全なものと同じく人間の造り出したあらゆる制度は、冷静さという視点から眺めればユーモアの相応しい題となる。」(*EEM*, 235-236) と述べてユーモアの意義を認めているように、ユーモアは「社会批評家にはなくてはならぬ自然な手段であり、社会の愚行を批評するために用いられてきたのである。ユーモアを巧みに配することで、教訓主義や感傷主義に陥ることなく弾力性や均衡が与えられるの

である。]<sup>#32</sup>

しかし Thoreau はユーモアを社会批評の目的ばかりでなく、「最も神的な力 (the divinest faculty) (EEM, 237) と結びついていると考えている点が重要である。既に指摘したように、真理洞察の一つの修辭的方法として生み出された逆説が、常識をひっくり返す辛辣で風刺的含蓄が濃いものに対して、ユーモアには人生に対する著者の寛大な気持が見出せる。だが面白さ、滑稽さに酔い痴れるわけにはゆかない。彼が言わんとしている意図は、ユーモアの背後にある物事の根源的な意味と直接関わっているからである。読者はパラドックスやユーモアなど *Walden* の多種多様なレトリックを決して作者の詭弁だと考えてはならぬ。彼は効果的な言語表現を求めてやまぬ真摯な作家なのだから。

Thoreau が建てたウォールデンの小屋は、当時のコンコードの住民の間ではよく知られていたようで、「私は森に住んでいた時、私の人生のどの時期よりも一層多くの訪問客をもった」(143-144) と語っているように、皮肉にも多くの訪問客で賑っていたのであった。その中には酔客から近くのフィッチバーグ鉄道で働いている線路工、妹の Sophia、樵の Alek Therien、Emerson 一家、Alcott 一家、Hawthorne、Channing、子供達、逃亡奴隷、自称社会改良家など実に多彩な顔ぶれであり、多い時には一度に25~30人も押し寄せて来る始末であった。また彼が両親の家や Emerson の家を度々訪れている事実はよく知られている。このため Thoreau にはプライバシーがなかったと思われるかもしれないが、Harding が述べているように「ウォールデンの体験は主に孤独と自然との交流の時期であったことを忘れてはならない」<sup>#33</sup>のである。ともかくこのような事実から、Thoreau はとかく思われている人間嫌いとは少なくとも一線を画していることがわかる。特異な個人主義者、禁欲主義者でありながら、人間的なやさしさと愛情が彼の心の中にあるのである。もしそうでなければ、いわば人間の本質的な存在に直接関わる *Walden* という作品が生まれるはずがなからう。

“Visitors” の章は “The Village” や “Baker Farm” の章と同じく *Walden* の中でも比較的印象の薄い章と考えられる。*Walden* の中で重要な要素である季節とは関係なくストーリーが展開し、morning や spring など覚醒のイメージを喚起させるものも殆ど見あたらない。語り手は訪問客によって靈感を受けるどころではなく、むしろ訪問客を迎えている間、前章で思う存分享受した自然との共感の中断を余儀なくされたのであった。本章の存在価値を幾分でも高めているのは、フランス系カナダ人の樵の登場であり、彼と語り手自身の二つの森の生活が対比されることにより、*Walden* の主題の一つである「簡素な生活と高き想い」の意義が披露されるであろう。

とかくウォールデンの語り手は孤独のみを楽しみ、自然観察に没頭していたように思われがちだが、彼は人間観察の方も忘れなかった。なぜなら人間の神性さの復活こそ彼は願ってやまないからであった。Selborne を書いた White のような人間味のないナチュラルリストとして自然観察に終始するのではなく、語り手の最終的な狙いはあくまでの人間の生き方にあり、その前提としての自然の観察があったのである。したがって *Walden* に登場する多彩な人物 (樵、Flint、John Field、詩人、釣人、氷切り人夫、その他 Emerson や Alcott としき人物達やウォールデンの森の先住者達) が自然と同様彼にとって意義ある存在であり、自然描写だけでなく豊かな人間描写が *Walden* の芸術性を一層高めているのである。

語り手は自らの森の生活の意義と、同じく森に生きる樵の生き方を比較し、後者に欠けているものを示唆する。*Walden* ではこの樵に関して直接名前とは言及されていないが、*Journal* (PJ, 2: 160) 及び *Walden* の第一稿から判断すれば、Alek Therien という男であることがわかる。彼は「真正正銘のホメロス詩編中の人物で、相応しい詩的な名前をもっている」(144) と形容される。ここで言う「詩的な名前」というのは、Therien がフランス語の terrien (農夫) を暗示するからである。Therien は今日では見出すのが難しいほど「単純で自然な男……悪徳とか疾病とは無縁の……28才、

12年前にカナダと父の家を離れ、いつかは農場を——多分彼の故郷で——買うための金を儲けようと合衆国で働いているのであった。」(145) TherienとThoreauはほぼ同年齢で、その上進む道は違っていても将来に対する希望をもってはいたことは共通していた。それゆえTherienが「もの静かで孤独であり、しかもそんなにも幸福であるので彼に興味を感じた」(146)と述べているのである。

更に「彼が丸太の上に座って弁当を食べていると、ヤマガラがやって来て腕に止まり、つまんだジャガイモをくちばしでつつく……彼の内部では動物的人間 (animal man) が主として発達していた。肉体的耐久力と満足とにおいては、彼は松や岩の従兄弟であった」(146-147)と述べられ、彼は genuine, unsophisticated, simple, natural, without anxiety or hasteと形容される。また樵として木を切る際には、後から新芽が元よく育ち、樵がその上をすべれるようにと地面すれすれに切っている。こうした彼の行動は、FlintやJohn Fieldと異なり、“Economy”で言及された物質文明を謳歌するわけでもないで、語り手にとって高く評価されることになる。しかしそうかといって作者は手ばなしで彼をもちあげているわけではない。彼はいわば自然の中で動物的に盲目的に生きているだけで、語り手が実践している「簡素な生活と高き想い」のレベルにまで達していなかったのである。Therienに対する失望は、丁度インディアンに対する失望と同じ類のものであった。Thoreauはかつてインディアンについて *Journal* の中で触れ、「インディアンの魅力は自然の中で自然に拘束されずにいること——自然の住人——客ではない——そして自然を軽々と優雅に纏っていることだ」(*PJ*, 1: 304)と高く評価していたが、後の *The Maine Woods* の中に登場するインディアンは、「自然を粗末にいい加減に利用する卑劣でだらしない奴だった」(*MW*, 120)と述べて失望を露にしている。ここで重要なのは simplicity の捉え方である。Thoreauは simplicity の二面性を次のように述べている——「ものの簡素さには二種類あって、その一つは愚かさ (foolishness) に似たもの、もう一つは知性 (wisdom) に似たものである。哲学者の生き方は外面的には簡素 (simple) であるが、内面的には複雑である。野蛮人の生き方は外面内面とも単純 (simple) である。」(*J*, 5: 411-412) 多くのインディアン、そしてTherienも内面はシンプルすぎて、語り手の主張する「高き想い」の方はさっぱりなのである。“Economy”で言及された「文明人の知性と野蛮人の頑強さ」(13)というの、簡素さと高き想いが結びつかねばならぬことを意味し、語り手のとりうる最も望ましい姿勢となる。

語り手はTherienの知性や可能性が眠っていると考える。「彼の内なる知的な、そしていわゆる精神的な人間 (spiritual man) は、幼児の内においてと同様眠っていた。彼はカトリックの僧侶が原住民を教える、あの無邪気な効果的でないやり方においてのみ教育されていた。そのやり方は教え子は自覚の域 (degree of consciousness) にまでは教育されず、ただやっと信頼と尊敬を知る程度で、子供は成人とはならずいつまでも子供のままだにされているのである。」(147) 語り手が animal spirits あるいは animal man と形容するものは、Thoreauの暗示する野生や野蛮性に近い意味で使用されている。wildnessやsavagismは *Walden* を貫く一つの重要なイメージであるし、野生讃歌ともいえる“Walking”ではその本質が徹頭徹尾論じられており、Therienの生き方はThoreauの森の生活と多くの共通点をもっていた。しかし animal man だけに支配されると「未発達の人間 (embryo man)」(213)の域を出ることなく、「静かなる絶望の生活」を送る人々とたいては変わりはない。「いわゆる精神的人間は眠って」しまうのである。このように人間の divinity を追求する語り手にとって人間の中の animal man は憎むべき存在なのだが、animal man と spiritual man の二面性に関しては決してTherien一人の問題ではなく、最終的に語り手自身にもふりかかってくる大問題であり、後の“Higher Laws”ではこの最も困難な問題が俎上にあげられ、徹底的に究明されることになる。もっともこの問題は goodness と wildness の均衡の困難さそのもの

に深く関わるものであるので、理想と現実の軋轢はそう簡単には解消できるものではなかった。

ロマン派の詩人が純真無垢で素朴な子供の眼を高く評価していたことについては、既に“Where I Lived, and What I Lived For”のところで触れたが、語り手はそのような子供の眼を失わず、かつ“Reading”で述べたように読書を重ねて目覚め、すなわち「自覚の域」に達する「知的飛翔」を切望していた。また教育の重要性については、“Where I Lived, and What I Lived For”と“Reading”の2章を通して指摘されていたが、はからずも Therien はカトリックの僧侶に教えられただけで、真実を啓示してくれる「聖なる師」に教えを乞うことはなかったのである。実際読者は Therein らしき人物が“Reading”で言及されていたことを思い出すに違いない——「私はフランス語の新聞を取っている中年の樵を知っているが、彼の言うところによると、それはニュースのためではなく……フランス語を『忘れないため』であるそうだ。私が彼にこの世でできるいちばん良いことは何だときくと、彼はこの他には自分の英語を忘れずにその知識を増すことだと答える。」(106)しかしこの考え方は Thoreau の理想と比べるとはなはだしく低く、「軽い読み物、入門書、教科書」(107)の類と同じで、「かくして我々の読書と会話と思索とは、おしなべて小人島の住民にのみ相応しいはなはだ低いレベルに留まるのである。」(107) Therien の読む本と言えは暦と算術の類のもので、知識のレベルはこの程度に限定されてしまい、「事物の秘密を洞察しその中に切り入る」(98)ほどの知性は毛頭期待できない。ともかく本章は“Reading”を補足する実際的な例を提供し、章間の有機的関連性を再度思い起させてくれる。

語り手の理想はどこまでも高く、自然の中に住み、子供のまま自然と調和して生きるだけでなく、精神の未開状態を脱して洞察者の域にまで達することを読者に強く望んでいる。それは一言で言えば「簡素な生活と高き想い」の完全な達成ということになる。だが「高き想い」を実践できない Therien に語り手は「今まで見たことのない人間を見て取った」(148)と述べ、彼に強く惹き付けられているのである。それは彼のシンプリシティーの中に現代社会の仕組を再検討する幾つかの暗示を見出したからに他ならなかった。語り手は Therien の言葉に耳を傾け、驚き喜ぶのであった。それは彼自身意識の片隅で忘れかけていた大切なものを思い出させた。しかしこのことは逆に語り手自身もいつの間にか憎むべき文明に染まりつつあったことを示すもので、彼には衝撃であったに違いない。語り手は自戒の念をこめて Therien の言葉に耳を傾ける。それは先にも言及したことごとだが、シンプリシティーの二面性と大いに関係があることだった。

語り手によれば、Therien は「Shakespeare のように賢いのか、子供のように単純無知なのか、彼のうちに精妙な詩的な意識があるのではないか、それとも愚痴なのか判じかねるのであった」(148)と形容されるように不思議な存在である。しかし注意しなければならぬのは、彼が“Where I Lived, and What I Lived For”で強調したシンプリシティーのもう一つの側面である。それはこの引用の中にも窺われる子供の二面性と密接な関わりがある。従来の子供のイメージと言えは、Tony Tanner の言うように<sup>234</sup>、一般的に純真無垢な心を持ち、大人の疑念や苦悩とは無縁で、人生に対して常に驚きを失わない存在であったので、ロマン派の詩人達にとっては特別の関心の対象となっていた。当然のことながら Thoreau もこうした見方を踏襲してきたことについては既に触れたが、子供にはもう一つの無知という否定的な側面があることを忘れてはならぬのである。Therien は子供のもつ明と暗の両方のシンプリシティーのイメージを合わせもっており、このいわば子供のまま成長した Therien と「交渉をもつことは、物を考える人間に多くのことを示唆する」(148)ので、彼との会話は語り手が追い求めてやまぬ「人間の定義」(149)としての「全体的な人間」の構想を考察する上で大変参考になったに違いないのである。

語り手は次のような質問をし、Therien はそれに対して単純かつ明快に答える。

〔質問〕——君は工場なしですませるか？

[ 答 ] — 自分は手織りのヴァーモント灰色地の服を着ているが、これはよい。

[ 質問 ] — お茶やコーヒーはなくてもかまわないか？

[ 答 ] — この国には水の他に何か飲料が出るかね？ 自分は水にドクニンジンの茶を涵して飲んだことがあるが、これは暑い時にはただの水よりよいと思った。

[ 質問 ] — 金銭なしでやっていけるか？

[ 答 ] — もし自分が一頭の牡牛を所有しているとし、針と糸とを店から買いたいと思った場合、その都度その金額分だけこの動物のある部分を抵当に入れてゆくというのは不便であり、じきに不可能になるだろう。(148-149)

この禅問答に似た（一見 Therien は禅師らしく見える）会話から、Therien が天才なのかそれとも全く的はずれの即物的な愚者なのか語り手は判断に一瞬躊躇したが、彼の魅力はその独創性にあるのだった。彼は「自分に関係のあるものとして説明することにより多くの制度 (institutions) をいかなる哲学者よりも適切に弁護する」(149) ことができた。「それは結局社会の多くの制度の再発見」(150) を独自に示唆するに他ならないからである。語り手は“Economy”の中で文明化の過程をその源から現代まで辿り、「何が人間の主要目的であるか」を問い、文明を見直そうとする姿勢を貫いた。例えば金銭に関しては、「あくた金を集めてはみたもののその使いみちを知らず、あるいはそれから逃れることも知らず、つまりは自分をつなぐ金銀の鎖を鍛えあげ」(16) ると述べて金の亡者を風刺し、“Conclusion”では「金銭は魂の一つの必要物を買うにも入要ではない」(329) と語って金銭の価値を否定さえする。しかしこうした語り手のやや抽象的ともいえる論に対して、Therien は「金銭の制度についての最も深遠な解釈と pecunia [金銭、財産の意のラテン語、語源は pecus 「牛」] という言葉の語源そのものを示唆し、それと符合するようなやり方で金銭の利便を説明した」(149) のであった。Therien がはたしてラテン語を知っていたとは思えないが、彼の即物的な金銭の説明が語り手にとって意外にも金銭の必要性を納得させうるのだった。これは語り手にとって盲点だったに違はなく、文明化の過程を検証する点で参考になるものだった。それゆえ Therien の独創的見解を評価するのだが、ただ語り手は彼の独自の思想がそれ以上成熟しないのに不満を覚えるのである。彼に「何か生きるためのより高い動機 (higher motive) を示唆しよう」と欲し」(149)、「今の自分にいつも満足しているのか」(149) と尋ねたところ、物に不足さえしていなければ満足であるというような答が返ってきて、語り手は「彼に物事の精神的見方 (spiritual view) をさせることはできなかった」(150) と白状せざるをえないのである。更に彼の思想がいくら独創的なものであろうとも、それが完成されたものではなく、いや完成しようとさえ努力しない以上、無用の長物となる。「彼の思索はあまりに原始的で彼の動物的生活 (animal life) に涵っていたので、それは単なる物知りよりは有望なものであったが、人に伝えるに足るほどに成熟することは稀であった」(150) と述べる時、語り手はもはや原始性のみを主張しているわけではないのである。この点 Krutch が言うように Therien との出会い「原始時代の人間、あるいは野生に戻りたいという幻想を思い止まらせた」<sup>35</sup> ことになる。“Economy”で強調したように、「文明人の知性と野蛮人の頑強さ」(13) の両方が肝要なものであり、「文明生活と野蛮生活の統合により再生がもたらされうる」<sup>36</sup> と考えてある程度の文明の進歩は肯定されるのである。この認識は後に goodness と wildness を論ずる際にも重要なウエイトを占めることにつながってゆく。

Therien の生き方には作者が愛してやまぬインディアン（インディアン）の生き方がいくらか投影されているように思われる。彼らは少なくとも人間を疎外させる文明を避け、野性的自然の中で生きる「自然の住人」であるからだ。しかしいくらか自然に精通した「気高き未開人」たるインディアンでさえ Thoreau から見れば限界があったように、Therien もその限界から逃れることはできなかった。い

くら自然の中で簡素な生き方を実践しようとも、自然から精神的道徳的なものが何ひとつ喚起されていない以上、彼らは作者が求める理想的な人間のモデルとはなりえないのである。ここでも「天」と「地」、「天上的なもの (celestial)」と「地上的なもの (terrestrial)」の関連性が重要な問題となってくる。Thoreauにとって、「天」と「地」の両方を忘れた存在としての「静かなる絶望の生活を送る」大衆がいる。「地」に精通しながら「天」を向いていない人間が Therien である。「天」と「地」の両方を向くのが、植物、特に樹木であったことは既に述べた。「なぜ人はしっかりと地中に根をおろしながら、それと比例して天に立ち上がらないのか」(15) という問は、*Walden* を貫く最も重要なイメージを喚起させるものであり、このような「天」と「地」の両方の特性をわきまえて樹木の成長を遂げる人間こそ、Thoreau が追求する理想的な人間像の原型となってゆくのである。

作者が「暗く泥深い (dark and muddy) かもしれないが、あだかもウォールデン湖がそうであると思われる通り、底知れない (bottomless) 天才の人間が存在するかもしれないことを暗示した」(150) と述べて Therien に対する言及を終えているのは、彼に精神的なものが欠けていることは十分承知の上で、彼のもつ「野生」になみなみならぬ魅力を感じているからに他ならない。これは後に語り手自身にも直接関わる問題として、“Higher Laws”において詳しく検討されることになるが、この引用の中で今までと全く無視していた人間の暗の部分である dark や muddy の側面に注目したのは、語り手の意識の重要な変化の兆候とみなすことができよう。ただ作者の Therien に対する態度が今ひとつ明確でありえないのは、彼の中に見られる際立った二面性ゆえである。今まで主として非難の対象になったのは、自然にも精神性にも欠ける「静かなる絶望の生活を送る」人々だったのに対し、Therien は少なくとも自然の中で自然の秩序に合わせて生きる樵であり、作者の目覚めへの条件の一つを満たしているからである。そのために精神性の欠除に対する非難は激しいものの、全面的に否定し去ることのできないアンビヴァレントな態度に終始することとなった。この姿勢が後の“Higher Laws”における「善と野生」を論ずる際にも現れてくる。実際のところ Thoreau と Therien の関係は、初めて会った1845年7月から *Walden* の出版を経て Thoreau が亡くなる1862年5月までの17年間に大きく変化していた。Bradford によれば<sup>37</sup>、Therien に対する Thoreau の態度は三段階に分けられる。第一段階はウォールデン滞在中の1845年7月から1847年9月までの間で、当時の *Journal* には Therien が実名で挙げられ、「真にホメロスの男」とまで形容されて高い評価を受けていた。第二段階のウォールデンを去って *Walden* が出版されるまでの7年間、Therien は型にはまった雇われ労働者になり下り、Thoreau が期待していた彼の秘められた才能や可能性は開花することはなかった。第三段階の *Walden* 出版から亡くなるまでの間、Thoreau 自身は若い頃の希望を達成したのに対し、Therien の方は一向に「自覚の域」に達せず、ついにはアルコールにまで手を出す始末であった。もはや彼には昔の面影はなかった。ここに至って Therien の「森の生活」は完全に否定され、*Walden* で述べた作者の期待は虚しくも裏切られ、「静かなる絶望の生活を送る」一人となってしまったのであった。1845年から1854年の間の Therien のイメージで *Walden* の中に書かざるをえなかったために、彼の Therien に対する見方はどうしても徹底しなかったのであった。

Thoreau は Therien を通して幾つかのことを学んだが、その最大のものは皮肉にも彼自身の自然に対する思い入れを幾分修正しなければならないことであった。なぜならば Therien の例は「シンプリシティーが不毛を意味する例であり……質素な暮らしが高度な思索を導くわけではなかった」<sup>38</sup> からである。自然の簡素な生き方に触れることは人間の生き方の本質に関することだが、それだけ実践していればよいというものでもなく、「意識的な努力を通して人間は自らの生活を高めることができる」(90) と述べられていたように、たえず知的な自努力を積み重ね、「神」に一步でも近づ

かなければならないのであり、ここに人間としての価値があった。「簡素な生活」は「高き想い」と表裏一体の関係にあり、両方が実現されて初めて「天」と「地」の均衡が維持されうる。この意味においてとかく軽視されがちな“Reading”の章が、文明の唯一の肯定の章として「知的飛翔」を訴える極めて重要な章であったことを、今さらながら読者は再認識させられるのであった。

“Visitors”の最後は、語り手の人間観察の総まとめとなる。彼は訪問者を二種類に区別する。その一つは森の中に入るのを素直に喜ぶ少年少女達であり、もう一つは生計を稼ぐのに窮々として森の美德を享受できないせわしない実務家や農夫、牧師、医者、法律家達である。彼の軽蔑の対象は「踏みならされた道 (the beaten track) を行くのが一番安心だときめこんだ若い人々」——この「踏みならされた道」という言葉は、作者の最も嫌う言葉の一つであり、“Conclusion”の中で森を去る理由を述べた有名な一節では自らの生き方に向けて発せられることになる——「年齢と性との区別なく、老いこんだ病弱で臆病な人々」(153)に向けられる。彼らは「半分死んだ (dead-and-alive)」(153)と形容されるが、要するに虚ろな生きる屍の人々同然なのである。彼らは養育院からやって来る「少し頭の足りない人々」(151)よりもたちが悪かった。なぜなら少し足りない人間は自らが「知性に欠けている」(151)ことをわきまえて行動しているのであったからだ。虚ろな連中よりは「キイチゴを取りに来る子供達、……朝の散歩をする鉄道関係の人達、漁夫と猟師、詩人と哲学者、つまり自由を味わうために森に出て来て、村をすっぱりと抜け出して来たすべての正直な巡礼者」(154, 傍点筆者)を快く迎え入れた。語り手は彼らに向かって「よく来たね、同胞の諸君! よく来たね、諸君!」(154)と挨拶をする。それは *Walden* の読者に向かって「よくここまで読んでくれた」ことを歓迎するかのよう響くのであった。

#### 註

1. *The Magic Circle of Walden*, p. 62.
2. ジョン・クーパー・ボウイス著原一郎訳『孤独の哲学』(みすず書房, 1977), p.181.
3. ルソー著今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』(岩波文庫, 1960), p. 87.
4. ダンテ著平川祐弘訳『神曲』(河出書房, 1966), p. 520.
5. ジョルジュ・ブーレ著岡三郎訳『円環の変貌 (上)』(国文社, 1990), p. 22.
6. Perry Miller, “Thoreau in the Context of International Romanticism” *NEQ*, 34, (1961), p. 150.
7. ゲーテ著高橋義人編訳『自然と象徴』(富山房百科文庫, 1982), p. xvi.
8. John Hildebidle, *Thoreau: A Naturalist's Liberty* (Cambridge: Harvard University Press, 1983), p. 97.
9. William Howarth, *The Book of Concord: Thoreau's Life as a Writer* (New York: Penguin Books, 1982), p. 10.
10. 『人間——過去・現在・未来 (下)』p. 110.
11. *Nature's Economy*, p. 89.
12. Richard Schneider, “The Balanced Vision: Thoreau's Observations of Nature” (Ph. D. dissertation, University of California, 1973), p. 191.
13. シェンク著生松・塚本訳『ロマン主義の精神』(みすず書房, 1975), p. 218.
14. 『自然と象徴』, p. xi.
15. *The Magic Circle of Walden*, p. 93.
16. William Wordsworth, *Poetical Works* (London: Oxford University Press, 1966),

- p. 461.
17. 『円環の変貌上』, p. 11.
  18. *Ibid.*, p. 20.
  19. *Ibid.*, p. 23.
  20. 『自然と象徴』 p. 11.
  21. ビル・マッキベン著鈴木主税訳『自然の終焉』(河出書房新社, 1990), p. 106.
  22. Brian Harding, *American Literature in Context, II 1830-1865* (London: Methuen & Co. Ltd., 1982), p. 146.
  23. *The Shores of America*, p. 4.
  24. 『誠実とほんもの』, p. 13.
  25. William D. Drake, "The Depth of *Walden*: Thoreau's Symbolism of the Divine in Nature" (Ph.D. dissertation, University of Arizona, 1967), p. 177.
  26. James McIntosh, *Thoreau as Romantic Naturalist: His Shifting Stance Toward Nature* (Ithaca: Cornell University Press, 1974), p. 24.
  27. *Ibid.*, p. 9.
  28. *Nature's Economy*, p. 100.
  29. *Ibid.*
  30. *Ibid.*, p. 108.
  31. Edward L. Galligan, "The Comedian at Walden Pond", *South Atlantic Quarterly*, 69, (1970), pp. 20-37.
  32. *The New Thoreau Handbook*, p. 174.
  33. Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau* (New York: Dover Publications, Inc., 1982), p. 196.
  34. Tony Tanner, *The Reign of Wonder: Naivety and Reality in American Literature* (London: Cambridge University Press, 1965), p. 7.
  35. *Henry David Thoreau*, p. 81.
  36. *The New Thoreau Handbook*, p. 147.
  37. Robert W. Bradford, "Thoreau and Therien" *American Literature*, 34, (1963), pp. 499-506.
  38. 『シンプルライフ』, p. 211.

## 第七章 “The Bean-Field” と “The Village”

## I

## “The Bean-Field” ——大地の住人

冒頭「その一方で (meanwhile)」と書き始められていることからして、前章との継続的な意味合いが見られる。本章 “The Bean-Field” と次章 “The Village” は、“Solitude” と “Visitors” の関係と同じく自然と文明のコントラストが特に際立った章とみなすことができよう。ただ “The Bean-Field” は “Solitude” と同じく自然をその主たる対象とし、自然の一部になりたいとする語り手の願望——他の生物と同じく自然の秩序の中にいるという存在感——を描いてはいるが、その描き方は好対照をなしている。それは “Solitude” で見られた「共感」を主とするエクスタシー体験とは異なった「大地の住人 (native of the soil)」（157）としての意識であり、単なる受動的な自然観察者の領域から直接自然の営みに参加しようとする積極的な生き方が見出されるのであった。

豆作りを中心とする農業実践は、森の中での自活のためには必要不可欠な行為であった。ウォールデンの森は自然が豊かであるとはいえ、その実りだけで勞せず暮していけるエデンの園というわけではなかったし、ましてや「牧歌的生活」（122）を期待して森に入ったわけでもなかった。Thoreau は “Paradise (To Be) Regained” で強調したように、勞せず暮すのは怠惰にすぎず、ヨガ行者のごとく「瞑想や仕事を捨てることで」（112）1日すべてを過すのも本意ではなかった。むしろ自然の中で額に汗して働くこと自体に意義を見出していたのである。「特に戸外での手による労働は、文学にも携わる者にとっては極めて貴重なものである……私は音楽や詩のように最も微妙な影響力により敏感になる。」（J, 3: 216）と語っている。彼は手 (Hand) と知性 (Head) と心 (Heart) の3Hが程よく均衡のとれた生活を望んでいたのである。

豆作りのための土地の開墾は、7月4日に小屋に住み始める前の春から小屋建築と並行して始められ、続いて豆の種が播かれたので、丁度この夏の間に豆は大きく成長して収穫を間近にひかえていた。今までウォールデン湖畔での生活は、「音」、「孤独」、「訪問者」が語られたにすぎなく、実際ここでの生活で時間的に大きな比重を占めていたのは、語り手を大地に結びつけるこの豆作りの過程に他ならなかったのである。彼は次のように語って、自らも大地の住人であることを宣言する。「豆は私を大地に結びつけた、それゆえ私は Antaeus [大地の女神の息子で、大地からそのエネルギーを得ている] のような力を得た。」（155）更に「私の存在と影響とのあわれのの一つは、これらの豆の葉、トモロコシの葉、ジャガイモの株に見られるようになった」（156）と述べる一節には、明らかに既に “Where I Lived, and What I Lived For” で見た語り手と小屋との関係と同じく、語り手と豆を初めとする作物とはもはや単なる人間と物との関係を越えた、相互に影響しあう有機的な関係にまで高められていたのである。そのような認識から「私は豆から何を学び、豆は私から何を学ぶべきだろうか」（155）という言葉が発せられたのであった。語り手が自然の一部になりたいということは、“Solitude” で見られたようなエクスタシーの境地ばかりではなく、メカニカルなものへの依存を減らして、このような自然の有機的關係の中に自己を置くことなのでもあった。それはまた “Economy” で懸念された非人間化と疎外を助長させる「分業」からの独立にもつながっていった。

語り手はこの豆作りについてことのほか詳細に読者に説明する。ある農夫が「きいきい鳴くりスがのさばるだけ」（54）と語る、耕作にはあまり適さない2.5エーカーの土地を開墾して豆畑を作り、長さ7マイルもの畝に豆を播いたのは6月の初旬であった。「馬や牛、作男や少年、あるいは改良

された耕作器具からの援助を殆どもたなかったから、私は人並みはずれて仕事が遅く、したがって並々ならず私の豆と親しくなった」(157)とユーモアをこめて語る。本来備わっていた大地の肥沃さを頼りに始めたこの実験農業の敵は、何よりも「虫と冷たい日とウッドチャック」(155)という自然環境であった。とりわけウッドチャックには $\frac{1}{4}$ エーカーをきれいにかじりとられてしまい、一度は激怒したが、自らとて彼らの生息地の一部を破壊して作った畑であることを考慮に入れば、語り手は同じくコンコードの森の生態系の中で生きるウッドチャックの権利は認めてやらねばならなかった。語り手のこのような自然に対する謙虚な態度こそ、人間として賞賛されるべき美德の一つなのである。

語り手が「私は豆から何を学ぶべきであろうか」(155)、「私はあくまでも豆を知ろうとした」(161)と語る豆畑での労働は、自然の意味を理解し、そのリズムに積極的に加わる上で重要な過程となった。種子は春になって芽を出し、夏に成長して秋には実を結び、収穫を終えるとその生命は死を迎えるが、種子の中に再生の可能性を残している。この誕生、成長、死、再生という永遠に繰り返される自然のリズムを、それが欠けているように思われる人間の意識の中に取り込み、精神的再生をはかることが肝要だと語り手は悟ったに違いなく、Waldenの主題はこの「再生」の問題を中心に今後展開することになるのである。

Sherman Paulは豆作りの意義を高く評価して次のように述べている。「小屋がThoreauの生活を築く上で最も明白な象徴であったであろうが、森の中での彼の仕事もまた季節のサイクル、意識の成長、春の春に至るためにますます必要とされるものになっていた。この中で最初の重要な象徴は豆畑であった。……彼が豆畑で働いたのは豆のためというよりはむしろ自然の過程に参入するため、自然との深い絆をもつことであった。なぜなら農業は自然で専門化されない職業、原始的普遍的な職業であり、またVarroが述べているように、人間は都市住民になる前耕作者であったという事実を彼は信じていたからである。」<sup>21</sup>語り手も述べているように、自らの肉体を維持するためのみの豆ではなかったことは、豆を米と交換している事実からも想像される。実際のところ豆は食用としては好きではなかったようである。では豆作りに一体何の意義を見出そうとするのであろうか。それは“The Bean-Field”の中程で述べているように、「いつの日か寓話作家(a parable-maker)の役に立つように、比喩や表現のためにだれかが畑で働いていなければならない」(162)からである。この寓話作家としての生き方こそ、人類再生の寓話の一つとみなされるWaldenの後半部で、Thoreau自身が身をもって証明している生き方なのである。すべての人が自然を離れ都市住民と化した暁には、人間固有の様々な美德や可能性は失われてしまうことになる。いやしくも「自然との深い絆」を維持できる唯一の場が農業という分野だったのである。後にも述べられるように農業は神聖な職であり、大地を耕しそこに播かれた種子が根を張り、芽が空に向かって成長する過程は、自らを不断につくり上げてゆく象徴とみなされ、作者の最も好む樹木的成長過程の原型となる。この植物の生き方こそ人間も見習わねばならないものであり、語り手は身をもって豆作りを実践し、豆の生き方に自らをオーバーラップさせるのであった。

彼はJohn Evelynの*Terra: a Philosophical Discourse of Earth* (1729)を引用し、「土は——特にそれが新しい場合には——一種の磁気を含んでいて、それが自らに生命を付与する塩、力もしくは効能(virtue)を吸収する」(162)と述べる。virtueは当然「美德」をも暗示するであろう。更にSir Kenelm Digbyが考えたように、土は空気中から「生きる霊力(vital spirit)を吸収した」(162)のかもしれないと語る。確かに1世紀以上も前のEvelynやDigbyの論は、19世紀中葉の科学からすればいかがわしい代物であろうが、作者がそれらを引用したからとて大地に含まれる窒素、燐、カリウムなどの科学的要素を否定するつもりは毛頭なく、むしろそれらより遥かに大きな大地のもつ生命力の存在を読者に知らしむるがためなのであった。

語り手は豆作りに関しても小屋建築と同様自らの手による労働を尊重した。手による労働は「不滅の道徳をもち、学者にとっては最高級の結果をもたらす」(157)と述べ、自らを「大地の住人」(157)と称す。彼同様大地の住人としては、ウサギやヤマウズラもあげられる。(281)自然の秩序やリズムの中に溶け込むというのは、「大地の住人」になりきることである。*Walden*の冒頭「私は文明社会の客人 (sojourner) となっている」と語られたが、裏返せばウォールデンでの生活では語り手は自然の住人であったことを意味し、native of the soilがそれを具体的に語る表現なのである。「大地の住人」のイメージはインディアンを容易に思い出させる。実際語り手は失尻を含む多くのインディアンの遺物を発見しているのである。彼が使う除草器はそのような遺物があたって鳴ると、「その音は森と空にこだまし、即座にそして無量の収穫をもたらす労働に対する伴奏をなし」(159)、彼はしばし手を休めて、かつてここに住んでいた原住民に想いを馳せるのであった。

もっとも「私の畑はいわば自然の畑と人為の畑の中間的存在であり、……半開化の畑であった」(158)と述べている以上、インディアンと全く同じような原始的生活を営んでいるわけではなかった。Garberも述べているように、野性的原始的な自然の畑ではないので、「半開化の妥協がはたして精神のかなりの要求を満たすものかどうか疑問である」<sup>182</sup>という意見もでてこよう。しかし今まで度々言及したように、ウォールデンの洞察者の位置は自然と文明の中間地点にあり、そのどちらの美德をも失わず均衡を維持してゆく姿勢が彼に課せられた責務のように思われるのである。実際彼がその湖畔に住んでいるウォールデン湖にしてみても、そこはメインの森やコッド岬のような原始の自然環境ではなく、自然はその純粋性を多分に有しているものの文明の侵入をさえ受けつつあるボーダーラインに位置しているのである。作者はあえてこのような一方の生き方のみを強制されることのない地を選び、「野蛮人の頑強さと文明人の知性」を結びつける場としたのであった。むしろ「このような場所が個人にとって理想的な位置であることは多くの批評家も認める」<sup>183</sup>ところである。実際語り手にとってはウォールデン湖は地理的な中間地点ばかりではなく、「地と天の間に位置し、両方の色を帯び」(176, 傍点筆者) ていたことが重要となる。なぜなら人間精神のとるべき道は、「天」と「地」の均衡を目指すものでなくてはならず、作者の最大の狙いが人間性の統一——全体の人間像の確立——にあったことからそれが十分窺われるのである。

“The Bean-Field”の中程で語り手が「私は豆を知ろうと決心した」(161)と述べる時、収穫した豆を試験管の中に入れ、化学的に実験してその成分や栄養素を調べたわけではなかった。それは豆を知るという行為のごく一部分にすぎないのである。彼にとって真に豆を知ることは、移り変わる季節の中で豆を播き、除草し、取入れ、脱穀、選別などの作業を経て、豆との「共感」を通して成立する類のものであり、その豆が本来もっている化学的成分ではなく、語り手と豆の間に生まれた有機的関係なのである。ここにも“Solitude”で問題となった作者の詩的自然観が反映されている。要するに豆畑は、額に汗して生活の糧を得るための場であるばかりでなく、「自然と同じく悠然と一日を過す」(97) こと、すなわち自然のリズムの中で自己を内省し、人間としての原点に戻る契機を与えるのであった。

既に述べたように *Walden* という作品は湖が中心的象徴として展開してゆくが、実際のウォールデンの生活においては湖と森は相互依存の関係にある。湖と同様森は四季それぞれの風情を醸し出し、いやが上にも語り手の想像力をかき立てる。「ここ森には原始時代の簡素さと純粋さ、そして町や都市から遙か離れた健康と希望が支配している」(Wr, 5: 171) のである。Emersonが述べているように、「森の中で我々は理性と信仰に戻る」(CW, 1: 10) ことさえ可能なのである。“The Bean-Field”は森の章であり、森の歌が聞えてくる。既に登場した“Sounds”がその章題にも拘らず、その音の多くが物質文明の象徴たる機械の軋む音であったのに対し、豆畑で働く語り手の耳に聞えてくるものは快いブラウンスラッシャーやアメリカヨタカの歌声であった。特に雌のタカは、

舞い上がったり舞い降りたりして円を描いていた。これを見て彼は「私自身の想いの表象」(159)のように思われ——「円は Thoreau の認識の基本的な単位である」<sup>184</sup>——「手をやめて除草器にもたれていると、畝間のどこからもこの土地が提供する無尽蔵の楽しみの一部である、これらの音と姿とが見え聞えした」(159-160)と語る。だが先程述べたように「半開化した畑」なので、“Sounds”と同じく“The Bean-Field”においても自然の造り出す音だけが聞えて来るわけではなかった。祭日には祝砲がこだまして聞えて来ることもあれば、風向きの具合により市民兵の軍事訓練のどよめきすら伝わって来るのである。時代を玩味すれば、これは当然メキシコとの戦争に備えたものと想像される。これらの音は語り手の意識に鉄道の音と同じく不吉な雰囲気を押しつけるが、彼はそうした事実をさらりと述べただけで、“Sounds”との重複を慎重に避けているように思われる。「村中が一つの大きなふいご……メキシコ人を串刺しにできるような気がした」(160-161)と述べるこの箇所では、全体として軽妙な語り口に終始し、時々読者を笑いに誘うが、もちろん文字通りに受取っては作者の意図とは大きくずれてくることは肝に銘じなければならぬ。しかし厳肅な語り口の章とユーモア溢れる章とが共存しているのが、*Walden* の文体の特徴の一つでもある。

“The Bean-Field”の中程に紹介されている農業実験の詳しい収支報告書は、“Economy”の小屋建築の収支報告書や生活の収支明細書に相当するものである。これらには「アメリカ人の統計好みの姿勢が典型的に見られ、自然理解と自然の事実の中にある真理認識にとって不可欠な部分であった」<sup>185</sup>ので、語り手の姿勢を一概にブラクティカルとして非難するわけにはいかず、また何よりも統計的データは読者を納得させる上で肝要なものだったに違いなかった。それによれば耕作に要した費用や種子代などで14ドル72.5セントかかったが、収穫した作物が23ドル44セントで売れ、差引き8ドル71.5セントの純利益を得ている。ここで見逃してはならぬことは、語り手が純粹に売買という経済的行為に関わっていることだ。実際 Thoreau はウォールデン滞在中肉体労働や測量の仕事で生活費を補っており、“Economy”で見たように建築の折にも建築用資材を購入していたのであった。確かに彼にとっては「金銭は魂の一つの必要物を買うにも入用ではない」(329)かもしれないが、金銭を全面的に否定しているわけではなかった。彼は決して原始の人間状況に帰れなどという時代錯誤的な主張をしているのではなく、ある程度の文明は肯定する。ただ「文明が本当に人間の生活状態を進歩させたのか」(31)を問い、文明を扱う当の人間の心の有様を鋭く抉り出すのを主眼としていた。

19世紀社会の一般大衆に訴えるために、観念的な魂の遍歴のみで押し通してもその成果が乏しいことを悟った作者は、経済というよく知られた分野で物と心の問題を問おうとするのであった。多くの人々が物に囚われているのなら、その本質を知るためにも自らが実際に実践してみることも肝要であろう。現実社会の鋭い洞察者でなくして精神の道を語り、それに向かって読者を導くことなど到底不可能なのである。そうした過程を経ているからこそ、作者の発言は机上の空論ではなく重みをもつのである。*Walden* を単に観念的あるいは宗教的な再生のドラマに終わらせるのではなく、現実に立脚した「救いの書」にしたいという作者の意図は十分読みとれると思う。それゆえ文明と自然、理想と現実のペアなる章を交互に配置して、「天」と「地」を共に認識させる構造を採用したのであった。

最初の年の豆作りは語り手が得意気に語っているように成功を収めたが、2年目は自らの食べる分しか作らなかったと告白する。これは彼自身詳しく言及していないが、豆作りは予想以上に時間がかかり、その上肉体を消耗するので、皮肉にもウォールデンに来た本来の目的である執筆の時間がままたまなくなってしまうからである。「豆は身体に栄養を与えるものだが、彼の心の方かというと、まさに飢餓状態であった。読書の時間すらままならず、漆塗りのランプは、点されることが殆どなかった。午前5時から昼まで畑で働き、その後他の仕事をすると、疲労困憊し、どうして

も早く眠らざるを得なかったのである。嫌々認めることになったが、豆作りは誤算であった。8ドル71.5セントの利益と僅かの作物では、失われた時間と費やした労働を償うのには不十分であった。次の年は作物を作らず、その代わり執筆に専念することを決意したのである。<sup>166</sup>これは同じ頃ブルックファームの実験農場で体験したHawthorneの印象と共通する。知識人共通のディレンマである知性と労働の調和は、その理念は別にしてうまくゆくことは少なかった。むしろThoreauの場合は比較的うまくいった方なのである。ともかく語り手は多くの豆を植える代わりに、「誠実、真理、簡素、信仰、無垢 (sincerity, truth, simplicity, faith, innocence)」(164)などの「超越主義的な」種を蒔き、この土地に根づいてくれることを期待し、次のように述べる。「なぜニューイングランドの人は新たな企てを試みて穀物、ジャガイモ、牧草の収穫、果樹園にそんなに丹精をこめずに——そういったものとは別な収穫をあげようとししないのか。なぜ我々の種豆にそんなに憂き身をやつし、人間の新しい世代は少しも念頭におかないのだろうか。……前に述べた諸徳のいくつかがその人のうちに根をおろし成長したのを必ず認められるようならば、我々は本当に養われ元気づくであろうに。」(164) このように豆作りの話から人間の美徳の話に移るのは当然の成り行きで、作者がWaldenの最終的な目標として人間の完成を第一に考慮していたのは間違いあるまい。自己の完成なくして生きる価値は見出せなかった。このためにも不断の努力をして自己を完成せねばならないが、そのモデルは自然、なかんづく植物の成長に見られた。彼が自らの豆畑で豆の成長を毎日楽しみにしていたのはこのためだったのである。したがって読者も彼の手塩にかけた豆であるWaldenを慎重に読まなければならないのである。

ところでこの箇所では“Economy”でも触れられた「種子」についてかなりつつこんだ言及がなされている。この「種子」という概念もThoreauの思想を理解する重要な概念の一つである。なぜなら種子そのものが有機的成長のエネルギーを内包しているばかりか、自然界において子孫を残すという重要な役割を担っているからでもある。前者の特性は天と地の両方に向かう樹木的成長の象徴としてWaldenでは度々取り上げられたが、後者の特性は主にWalden出版後のことであった。Richardsonが述べているように、「Waldenの中心には自由になりたいという願望があり、後の作品の中心には関連(connect)づけたいという願望があった。これは経済から生態学[自然の経済]への移行といえる。<sup>167</sup>つまりこれはより大きな視野で自然を捉えようとする姿勢であり、晩年の“The Succession of Forest Trees”などは、遷移のメカニズムが森の中の自然の経済といかに密接に関係しているかを指摘する点において、明らかにコンコード全体をその視野の中に入れて書かれた生態学的内容のものであった。この生態学(ecology)という語は、1869年ドイツの生態学者Haeckleによって「家」を意味するギリシャ語oikosから造られたものであり<sup>168</sup>、生活する有機体の生活行動を、個体としてのみならず、錯綜せる生物相互の交渉過程として、その住み場所ないしは環境において捉えてゆくことに端緒があった。<sup>169</sup>このように自然界の秩序を全体として考える姿勢は当時としてはThoreau独自のもので、エコロジカルな視点から、他の自然の構成要素と比べていかに人間存在が矮小かつ歪曲されているかを読者に提示して見せたのが、他ならぬWaldenという作品なのであった。

“The Bean-Field”の最後では、かつて神聖だとされた農業と現代の商業的農業とが徹底的に対比される。「古代の詩と神話とは、少なくとも農耕がかつて神聖なわざ(sacred art)であったことを示している。しかるにそれは我々によって不似合の性急さと不注意(haste and heedlessness)とをもって行われている。我々の目的は単に大きな農場と大きな収穫とをもつことになってしまう。」(165)更に続けて「我々は農夫がそれによって自分の職業の神聖さに自覚を表現し、もしくはその神聖な起源を思い起すところの祭典も行列も儀式をももっていない……彼を誘惑するのは利得と悦楽である。」(165)「彼は穀物の神Ceresと大地のJupiter神ではなく、むしろ地獄的な富の神

Plutasに供え物をする。食欲と利己、そして土地を財産、もしくは主として財産を獲得する手段とみなす……風景はいびつにされ、農耕は我々の手で墮落し、農夫は最も卑しい生活を送っている。」(165)金儲け優先の農業にうつつをぬかす農夫に対するこのような辛辣な口調は、まさしく“Economy”の口調そのものであり、作者の期待を裏切り、最も卑しい生活を送る農夫は「静かなる絶望の生活を送る」大衆の一人となる。「農夫は泥棒としてのみ自然を知っている」(166)と語る時、さしずめその貪欲な農夫の典型は“The Ponds”に登場するFlintに見出せるであろう。市場経済の価値観に染まったこうした人々には、いかなる神性さ(divinity)も見出されないことは、既に“Economy”で言及されていた——「市場におもむく街道の家畜馭者を見てみたまえ、どんな神性さが彼らのうちに働いていようか？」(7)これらの例は、人間の歴史において人間と大地との関係に深刻な変化が起こっていることをまざまざと示すものであった。「以前には人間は自然の一部であったが、今や人間は自然の搾取者となった」<sup>210</sup>と言われてもしかたがないのである。

しかし一方ではこうした商業的農業とは無縁の、「神聖なわざ」としての農業を実践する農夫もいないわけではなかった。*Walden*では言及されなかったが、George Minnotという農夫は「農夫の詩的生活を私に実現させてくれた最も詩的な農夫であり……作物を売るつもりもなく、労働が与えてくれる尽きない満足で報いられている」(J, 3: 41)と高く評価される。更に彼の言葉「世の中は逆さまになってしまった(the world is turned upside down)」(J, 3: 67)を*Journal*に書き留めた理由は、Thoreau自身が前々から思っていた倒錯した社会を裏付けるものであったからであろう。しかし自然の秩序の中で謙虚に生きてゆくMinnotのような農夫は少数派で、「大衆は極めて非詩的な存在となり」(J, 5: 347)、商業的農業を中心とする資本主義経済が時代を席卷するようになっていった。簡素な生活と高き想いを実践するMinnotのような詩的な農夫が、Flintの対極に置かれて然るべきなのだが、*Walden*では具体化されるに至らなかった。しかしMinnotの中にThoreauが追求してやまぬ「全体的な人間像」を読み取るのはさほど難しくはなからう。分業が進む中で農業は「『全体的な人間』の最後の砦」<sup>211</sup>なのであった。

語り手が現代農業を厳しく批判する姿勢を貫くのは、裏返せば商業よりも農業の方にまだ人間存在の意義を見出しているからでもあろう。確かに彼すら若干の経済活動に従事せざるをえなかったし、それに対しては幾らかの良心の苛責もないわけではなかったろうが、しかしながら大半の時間は豆畑で過したのである。彼にとって自然の中で心身ともに清められることが何よりも貴重な行為であり、完全で全体的な人間として成長する、多分に象徴性を帯びた行為と解することができるのである。

“The Bean-Field”の最後の一節には太陽のことが言及されている。「我々は太陽が我々の耕された土地にも原野にも森林にも分けへだてなく見おろしていることを忘れがちである。これらはすべて同じように太陽の光線を反射し吸収する。……我々は太陽の光と熱の恵みをそれに相応する信頼と心の広さをもって受けるべきである。」(166)ここで語り手が言わんとしているのは、人間こそが唯一の耕作者であると思っているその人間の傲慢さであり、人間中心的な自然観である。豆畑の方は彼を必ずしも「主要な耕作者」とみなしているわけでもなく、「水を与え、緑ならしめる、より自分に親しい自然の諸力に目を向け」(166)ているのである。人間をも含むあらゆる地上の有機体は、本来自然の中で一つの秩序、すなわち「何一つとして全体から離れて存在しえないという自然の見事なまでの統一性」<sup>212</sup>の中で生きている。しかるに“Economy”で見た通り、いわゆる人間の創造して来た物質文明は、その発展過程において自然と大きく乖離するばかりか、自然を破壊し征服する道を歩んで来たといえる。Thoreauはこうした状況を鑑み、万物の生命力の根源である自然に帰り、そこに救いを見出そうと努めた。彼は人々の目を太陽に向けさせる。我々が大地から疎外されるにつれて我々は太陽すら見なくなっていた。太陽は種子を育み成長させる自然界の生命力

の根源であるばかりか、神の啓示の表象であることを人はすっかり忘れてしまった。「太陽は今日も輝いている」(CW, 1:7) のに、実際真に太陽に目を向ける人は極めて少ないのである。Emersonの言葉を借りれば「大抵の人々は太陽を見ていない。少なくともごく表面的な見方しかしていない。太陽は大人の場合にはただ目を照らすだけだが、しかし子供の場合には目と心の中に射し込む」(CW, 1:9) のであった。多くの人々は心の中に射し込む光——「太陽の熱と光のもつ再創造の過程が、人間の魂をも天上に引き上げうる」<sup>113</sup> という意味など理解できるはずがなかったのであった。

この意味で“*The Bean-Field*”における語り手の農業実践も、他の例と同じくその経済的側面以上に超越主義的意味合いを多く含んでいるのであった。彼が経済性とか生産性を考慮せず、一部は「ウッドチャックのため」(166) に豆を育てたり、「雑草の種子が鳥たちの穀物倉であるその雑草の豊富さもこれまた喜ばしいことではなからうか」(166) と元来豆の敵である雑草にもその存在意義を認めようとする彼の姿勢には、多くの人々が忘れてしまった「共生」という謙虚さの美德が感じられる。ここに至って大地の住人としての語り手、及び豆畑、ウッドチャック、雑草、鳥、その他諸々のものが集まり、一つのコスモス、有機的統一を構成する。これはコンコードの人間社会ではついぞ見出すことができなかつたものであった。このように語り手の関心は、徐々に自然の多様な要素がどのように働き合い、関係しあって世界を構成しているかに移り、エコロジカルな色彩が強くなり始める。「関係」については今まで何回となく散見されたものだが、次章“*The Village*”以降語り手のアイデンティティー確認過程の中で重要な位置を占めて来るのであった。

## II

### “*The Village*” —— 関係の中で

第6章“*Visitors*”では語り手が多くの訪問客を迎えたのに対し、第8章“*The Village*”では逆に彼の方から進んで村を訪れる様子が描かれているので、一見奇妙な感じを受ける。もっとも“*Visitors*”の冒頭で「大概の人に劣らず社交を愛し……元来隠者ではないので、用があれば村にも出かけて行く」(140) と表明していたので、それを実行したとも考えられる。だがさすがに村では居心地が悪く、早々に退散して来たのが実情のようであった。そもそも *village* の語源を辿れば、それは“*Walking*”にも言及されているように、ラテン語の *villa* (農民) に由来するが、前章でも述べられたように神聖な農業を実践している農民は殆ど皆無であり、むしろ彼らは同じ語源から派生した *vile* (墮落した)、*villain* (悪人) を連想させるので、語り手が一目散に森へと逃げ帰ったのも当然といえば当然のことなのであった。

語り手は午前中を除草、読書、執筆にあて、午後湖で水浴した後日課のように村へ出かけて行く。それは村で「たえまなく行われている噂話」(167) を聞くためであったと語るが、実のところ Thoreau は村に興味があつて出かけるのではなく、両親あるいは Emerson の招待があれば彼らの気持を損なうことなくその招待に応じたのであった。物の支配する世界からあえてアルカディアを求めて脱出してきた語り手が、何故に毎日のごとく村を訪れなければならないのか、その説明が一切なされていないために読者は腑に落ちないかもしれない。だが、伝記的事実に精通している者なら、この背景に作者の均衡感覚があつたことを知る。これは必ずしも自らのプリンシプルを放棄することにはつながらず、むしろ彼の心に深く根差すより大きな人間愛の発露と考えられる。Worster はそのあたりの Thoreau の心理状態を次のように説明する。「Thoreau は父母や姉妹が彼に助けを

求めて来た時には、自分の原理を妥協させねばならなかった。彼は時にはとても憤慨したかもしれないが、助力を必要としている時には、たとえその善行がより大きな自然界との共同体的かつ親密な絆から彼を引き離すことになろうと、援助の手を差し延べることを拒否するほど強情ではなかった」<sup>314</sup>のであった。

ともかく彼は村へ出かけ、「鳥やリスを見るために森を歩くような気持で成人や少年を見に村をぶらついた。松風のかわりに私は荷車の音を聞いた」(167)と述べ、まるで村に出かけるのが自然と同じレベルであるかのように語る。もっともそれは作者一流のアイロニーで、事実「ホミオパシー[同毒療法——病原因子と同じ性質をもつ物質の少量で治療する方法]」(167)と断っているがごとく、最初から村の生き方に毒されるつもりは毛頭なかったのである。では村に何故に出かけるのか。彼は「人間の習性を観察するため」(167)と語る。実はこれから先の *Walden* の重要な主題となる人間性完成のためには、自然観察同様マン・ウォッチングは不可欠な行為なのであった。その例は既に“Visitors”のAlek Therienで見た通りである。

村は「大きなニュース編集室のように見えた」(167)とその第一印象を語る時、“Economy”の中で既にニュースの本質を知らされていた読者は、人々の語る会話の中にゴシップ以外の何物も存在しないことを読み取るであろう。ただし語り手が村の中で見出したものは、住民の軽薄なコミュニケーションばかりでなく、もっと本質的な人間性を歪曲させる存在——今や恒常化されてしまった諸制度 (institutions) ——であり、それらが彼には目障りだったのである。「村には食料品店、バー、郵便局、銀行があるが、機械の必要部分として、鐘、大砲、消防ポンプの車を備えている」(168, 傍点筆者)とあるように、村はその本来の語源を離れて機械と同一視されている。ここで肝要なことは、村のすべてのものが、自然の有機的な生き方に反する大きな機械の一歯車として共同体——「com-munity (共同の防御同盟)」(153)——を構成し、それがもはや簡単には動かし難い制度として定着してしまったという語り手の悲劇的認識である。この悲劇的認識は既に“Economy”(31-32)や“Sounds”(117-118)でも見た通りである。

村の中を歩けば、住民の物質的な欲望をそその「看板が至る所に懸けられて」(168)いるのに気がついた語り手は、本章の冒頭で述べたような「自然と同じさわやかな気分」(167)には到底なれず、「高いもの (high things)」に想いを寄せることでこのような誘惑から逃れようとしたのであった。彼は次のように語る——「堅琴に合わせて神々の讃歌を声高く歌って Siren の声を掻き消して危難からまぬがれた Orpheus のように、私の想いを高いものに寄せることによって、これらの危険から見事に切り抜けた」(168-169)のであった。彼にとって重要なのは、制度の完備よりもあくまでも個人の完成が優先されることなのであった。

“The Village”全体で6頁のうち、村の描写といえれば僅か2.5頁を占めるにすぎず、残りの大半は夜の闇の中、村から森の中の小屋まで手探りで辿りついた体験を中心に、作者の好む航海のメタファーが駆使されながら語られてゆく——「夜の中に乗り出し……森の中の私の安らかな港まで航海するのは大変楽しかった。外部はすっかり完全にとざし、舵取りは私の外部的な部分にのみ任せ、わかりきった航路なら舵は全部しばったまま、私は思想の愉快的仲間とともに下の船室にとじこめるのである。……私はどんな天候でも決して難船したり進退きわまつたりすることはなかった。」(169)このような航海のメタファーの使用は、「船乗りの探求的生き方が農民のそれよりも魅力的であった」<sup>315</sup>と考えていたからに他ならなく、本章ばかりか *Walden* 全体を貫く重要なイメージの一つを構成している。

作者は意識的に dark, darker, 更には darkest という最上級を使って森の闇を殊更強調するのだが、これは一体何を意味するのだろうか。その前に森に対する全く相異なるアプローチがあることを心得ていなければならない。その一つは自然の暗黒面の象徴としての森であり、もう一つは自然

の再生の象徴としての森である。例えば「人生の道の半ばで／正道を踏みはずした私が／目をさました時は暗い森の中にいた」で始まる『神曲』で描かれた森は、作者の「罪深い生活の寓意」<sup>16</sup>であったし、Hawthorneが*The Scarlet Letter*の中で描いた森も悪魔の支配する世界であった。Thoreauが人間の悪徳のアナロジーとして“Sounds”で描いた陰鬱で不気味な梟の住む森は、前者に属することになろう。しかしThoreauやEmersonが主として「森」を意識する時、「森」は若さ、理性、信仰、あるいは神をさえ暗示する場となる。したがって「アメリカの『自然』は同じ場所、ほとんど同じ時期に、いわばその良性面と悪性面を定着させたのであった。天空への、あるいは地平線の彼方への超越の夢と、深淵への超越・失墜の悪夢が語られた」<sup>17</sup>という指摘は重要である。

話を元に戻せば、“The Village”の森の暗さはDanteともHawthorneとも、また“Sounds”ともニュアンスを異にする、Thoreau独特のものが見られる。これには1850年頃から始めた夜の散歩と大いに関係があるように思われる。当時夜散歩することは一般に極めて稀であり、一層エクセントリックな人物だと自ら公言するような行為であったが、彼にすれば、昼間の自然もさることながら夜の自然の「野生さ」に惹かれたのであった。これにはおそらく彼のもって生まれたtamelessnessに対する反抗心——「Wordsworthでさえtameすぎる」(*PJ*, 1: 321)——が背景にあったのであろう。「正気を取り戻す」(*J*, 2: 268) ためには野生に触れなければならなかったものであり、「失ってしまった若々しいインスピレーションやヴァイタリティーの回復」<sup>18</sup>をはかる上でも重要だったのであった。

もっとも“The Village”における「暗い森」の意義は多少ニュアンスを異にする。語り手は、森の中で迷うことが肝要だと言うのである。「森の中で道に迷うのはいつでも驚くべき、記憶すべき、そして価値のある経験である。……我々が全く迷ってしまい、ぐるりと回転させられて初めて……我々は自然の広大さと奇異さ (the vastness and strangeness of Nature) がわかるのである。すべての人は眠りからもせよ瞑想からもせよ、目覚めるたびごとにあらためて羅針盤の方角を知らねばならぬ。迷って初めて——換言すれば我々が世界を見失って初めて——我々は我々自身を見出し始め、自分達がどこにいるのかを、そして我々の関係の無限の広がりを知るのである。(not till we have lost the world, do we begin to find ourselves, and realize where we are and the infinite extent of our relations)」(170-171)

語り手はこの一節で二つのことを言おうとしている。その一つは、「自然の広大さと奇異さ」という表現の中に野生さが暗示されていることであり、“Spring”の中の「人の踏みこまぬ森……我々は野生の強壯剤を必要とする」(317)、“Conclusion”の中の「宇宙は我々の視野よりも広大である」(320)につながってゆく。もう一つの、一層重要なのは「目覚め」、「自分を見出す」、「自分達がどこにいるか」、「関係の無限の広がり」という表現に集約される、いわゆるアイデンティティー確認の問題である。前者の野生の問題は*Walden*に一貫して現れる問題だが、語り手にとって微妙かつ悩ましい存在であったことは既に触れた。“The Village”はその章題からして前章の“The Bean-Field”と対照的なペア構造をなしているのは当然としても、季節を明確に示唆する語句や象徴もなく、他の章で頻出する朝のイメージも見出せない。本章が存在意義をもつとすれば、この一節に明確化された「関係」の概念に尽きるのである。

「関係」については既に見たところであるが、“Economy”では「世間と私との関係」(25)、“Where I Lived, and What I Lived For”では「人生を遊ぶ子供は大人よりもはっきりと真の法則や関係を見抜く」(96)と述べられていた。更に“Solitude”では詩的自然観と科学的自然観に言及した際に、Thoreauの関心が「関係」にあったことにも触れた。*Journal*の一節、「実際私に関心があるのは、そこにはなくそれと私の関係である (I know that the thing that really concerns

me is not there, but in my relation to that.)」(J, 10: 164) に要約されるがごとく, Thoreau の「関係」に対する主体的姿勢が彼の宇宙観, 自然観の原点にある。ロマン派の詩人達がこの「関係」という概念に魅了されたのは当然で, R. P. Adamsは次のように説明する。「ロマン派の思想は相対的, 多元的で, 絶対的価値観, 形式的な分類, 排他的判断を拒否し, 目新しさ, 独創性, 多様性を歓迎する。区別よりは関係, 特に人間と自然, すなわち宇宙と個人と社会の有機関係 (organic relationship) に関心がある。」<sup>219</sup> 彼らは「文明が抑圧し, 基軸宗教が拒否した人間のいくつかの側面, すなわち人間を有機的にすべての被造物に結びつけている絆の回復を求めた」<sup>220</sup> のであった。この有機関係をどのように読者にコミュニケーションするかについては作者が最も苦心してきたところであるが, 一般の人々は「甲斐性と信念との不足から, 人々は売ったり買ったりし, 自分達の生涯を農奴のように費しつつ現在の位置 (where they are) に留まっている」(208), 「我々が在るところに在らず, 偽りの立場に在る (We are not where we are, but in a false position.)」(327) こと, いやそのことさえ意識の中になく現状では, 哲学的にいくら言葉を繕い, 高邁で普遍的な神託を並べ立てたところで趣旨はわかってもらえるはずがなかろう。そこで Thoreau は彼らに「関係」を悟らせる最も明快で効果的かつ実際的な方法として, 森の中で迷った実体験のことを思いついたのであった。

その際肝要なことは, 「関係の無限の広がり」に流されることなくあくまでも自己の主体性を確立し, 自己が無数の関係の中心に位置すること——centralness (PJ, 1: 75)——によって「自我と宇宙を真の関係において」<sup>221</sup> 捉えることにならねばならない。「どこに迷って行こうとも, 宇宙は我々の周りに築かれていて, 我々が依然として中心なのである」(PJ, 1: 323) あるいは「宇宙とは中心に知性が位置する球である。太陽とて人間ほど中心的ではない」(Week, 349) のである。自己(魂)が宇宙に中心を占めなければならぬこと (centrality) については, “Where I Lived, and What I Lived For” で触れた通りだが, Journal 1842年3月15日の中では, 人間の魂こそこの世の中心に置かなければならないと強調されている——「すべての曲線が中心, 焦点と関係があるように, すべての性格の美も魂と関係がある——魂に向かって身体を振ることもそのことがわかっている優雅なしぐさなのである」(PJ, 1: 376) Emerson の比喩を借りれば, 湖に投げた石が同心円の波紋を作り, それが四方八方放射状に広がってゆくように, Thoreau 自身も宇宙の中心にいて (central still ということである), 彼の方から主体的な「独自の関係」という光を放射することになるのである。森の中で迷って初めて, 人は文明の諸制度の下で知らず知らずに制限を受けてきたこと, 自らの置かれた位置や関係を知る。その時人は今まで押し付けられた関係ではなく, 自己を中心とした世界との有機関係が広がっていることを悟るのである。この意味で「森の中で道に迷うのは, いつでも驚くべき, 記憶すべき, そして価値のある経験」となるのである。

William Drake は *Walden* を「関係の書」と定義し, 上記の箇所を引用して「これが *Walden* の構造を形づくる探求のパターンなのである」<sup>222</sup> と述べる。確かに “The Village” のこの箇所は *Walden* の構造的にも内容的にもターニングポイントとなっている。なぜなら Drake も述べているように, 第1章から第8章である本章までは1847年に書かれた *Walden* の第一稿をほぼ踏襲しているのに対し, 次章 “The Ponds” から “Conclusion” までは第一稿にない実に多くのものが補足され, ストーリーが多層化されていることがわかる。その中でも最も顕著なものは, “Solitude” に始まった語り手自身の自己探求の主題が一層明確化されたこと, および人間と自然の対応関係 (correspondence) を調べているうちに, 「なぜ我々が丁度見るこれらの物が世界を形づくっているのだろうか」(225) という本質的な疑問に遭遇し, 諸々の関係を統一する要素は一体何なのか考え始めたことであった。このことは「探求され, 明確化され, 確立された関係の最終的な結果は, 自己理解であり, 自らの関係を知ることは結局自分自身を知ること」<sup>223</sup> (傍点筆者) につながるのでは

る。Sherman Paulが「彼 [Thoreau] は何よりも人間、社会、自然との関係を正し、人生のカオスからコスモスを創造し、黄金時代という永遠の春を再度もたらしたかったのであった」<sup>註24</sup> (傍点筆者) と述べたのは、「関係」が「カオスからコスモスへのメタモフォーシス」と密接な結び付きがあることを端的に示すものであり、「関係」の認識が語り手のアイデンティティーの探求の原点となる意味で、「関係」は *Walden* の重要な概念の一つとなるのである。

語り手がこのように「関係」を高く評価しながらも、事態は極めて逆説的な経過を辿る。なぜなら森の中で道に迷った体験から、万物の関係の中心に位置する自己のアイデンティティーを確認しようとした矢先、皮肉にもその当人が逃れて来たはずの社会から一方的に関係を強いられる羽目に陥ってしまったからであった。語り手は「男や女や子供が家具同様に議事堂の真前で買ったり売ったりする国家に税金を払わず、その権威を認めなかった」(171) と高らかに公言するが、市民として納税の義務を拒否することは、法律上罰せられるのは日を見るよりも明らかで、「どこに逃れても人々はその忌まわしい制度をもって引つつかみ、無理やり乱暴な秘密結社に属させる」(171) のであった。この一件は1846年7月、作者自身が直接体験した人头税不払いによる投獄事件——後の“Civil Disobedience”で詳しく述べらることになる——を下敷きにしていることは読者も百も承知の上のことだが、元来人間の共同意志として作り出された制度が、いつの間にか自然とは異質の社会環境を創造し、それになじめぬ人間に無理やり関係を強いている典型的な例であろう。語り手は「私が力づくで抵抗したら多少の効果はあり、社会に対して『死にもぐるい』になることもできたのだ」(171) といかに自己弁護しようとも、この一件はウォールデン湖でさえもはや聖域ではなく、「関係」という目に見えない社会の圧力は、文明と自然のボーダーラインを簡単に越えて忍び寄って来ることを如実に示すものであり、事態はかなり深刻な、いや危機的な問題を孕んでいるとさえ言える。なぜならあらゆる関係を断絶していたかに見えたウォールデン湖での簡素な生活も、実は社会の営みや制度の中で行われていたという皮肉な事実が明らかにされたからである。もちろんそうだからと言って、社会の関係が全く及ばない荒野 (wilderness) の中で生活することで、作者の狙う人間存在の意義が解明されるとは思われないし、むしろ自己を含め多くの問題を抱えながらも、自然との調和がまがりなりにも維持できるウォールデン湖という環境が、結局は最も望ましい天と地の間接的な位置に相当するのであった。SchneiderはこのThoreauのとりうる中間の位置を高く評価して次のように語っている。「Thoreauはいつも天と地の間接的な位置を意識し、遠視的と近視的距離の間であれ、最終的に洞察者として中間点に関心を抱いていた。世界の両極を探求した後で、彼はいつも均衡のとれた中間地点に戻ることが重要だと感じていたのだ」<sup>註25</sup> ともかくこの事件を契機に、Thoreauは自我が決して歓迎されるわけではないが、社会の中で自らの良心や原則に則って行動する必要性も認めるようになった。このことは、究極の自己認識は自然との関係ばかりでなく、「社会に向けて開いた状態における認識」<sup>註26</sup> も必要であることを教えたのであった。ここにはいたずらに理想のみを追い求めるのではなく、率直に現実の諸問題と対峙しようとする芸術家の姿勢が見られる。

牧歌的なウォールデンの生活であえて忍び寄る「暗」のイメージを挙げるとすれば、第一に“Sounds”の鉄道であり、その次に本章で言及された目に見えぬ社会的制度の影響であろう。その他樵による森の破壊、水切り人夫によるウォールデン湖の水の商業化などの外的要因がある。自然との観照生活を離れた時、「森の生活」は必ずしも理想のエデンの園とは言い難い。しかしThoreauの置かれた状況がまさしく19世紀を生きる人間の諸問題を考察する上で恰好の位置であったことは逆説的な真理である。また彼個人の内的な要因として、メインの森やコッド岬への旅で体験した原始自然の混沌とした非人間的様相がある。これらの体験はDarwinがガラバゴス諸島で体験したのと同じくらいの衝撃的なものだったがに違いないが、これらの体験が全くのペシミスティックな認識

に至らなかったのは、一方でそれらの野生を高く評価する受け皿が Thoreau の方にあったからである。もっともこうした体験が彼自身のコスモス像探求とは相容れないものである以上、*Walden* では当然のことながら制限されている。野生の主題を正面から扱っていたとすれば現在の *Walden* とはその内容を大きく異にし、“Walking” のように物質文明批評書あるいは自然崇拜書として評価されることになったであろう。しかし *Walden* は単なる文明批評書でも、自然誌でもない。人間を主たる対象とする人間存在の意義を問う書であることを夢々忘れてはならないのである。

このことは“*The Village*”の最後の一節を読めば容易に理解されるであろう。作者は孔子の『論語』顔淵篇第19章を引用する。「子、政を為すに焉ぞ殺すことを用いん。子、善を欲すれば、民善ならん。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり、草はこれに風を上うるとき必ず偃す。」<sup>註</sup>この中で言及された「善」とか「徳」（英訳では共に *virtue* となっている）が「神性」(*divinity*)、「より高い (*higher*)」、「魂 (*soul*)」ともども *Walden* のキーワードの一つであることはいまさら言う必要もなからうが、各章に必ずといってよいほど言及される人間性完成に関する作者のコメントは、作者が常に天と地、それに真・善・美の調和と均衡のとれた「全体的な人間」という構想を念頭において *Walden* を組み立てていることを明確に示すものなのである。

#### 註

1. *The Shores of America*, p. 329.
2. Frederick Garber, *Thoreau's Redemptive Imagination* (New York: New York University Press, 1977), p. 137.
3. Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind* (New Haven: Yale University Press, 1982), pp. 92-93.
4. Joseph J. Moldenhauer, “Images of Circularity in Thoreau's Prose”, *TSLI*, I, (1959), p. 250.
5. “The Balanced Vision: Thoreau's Observations of Nature”, p. 158.
6. 『ヘンリー・デイヴィッド・ソーロウ——ある反骨作家の生涯』, p. 76.
7. Robert D. Richardson, Jr., *Henry Thoreau: A Life of the Mind* (Berkeley: University of California Press, 1986), p. 384.
8. *OEDS* に *ecology* の初例は Thoreau の *Letters* とあるが、これは Harding も認めているように *geology* の間違いである。*The New Thoreau Handbook*, p. 129. を参照のこと。なお *OED* 第2版では修正されている。
9. 梅棹忠夫, 吉良竜夫編『生態学入門』(講談社学術文庫, 1976) p. 33.
10. リン・ホワイト著青木靖三訳『機械と神』(みすず書房, 1972), p. 85.
11. Taylor Stoehr, *Nay-Saying in Concord: Emerson, Alcott and Thoreau* (Hamden: Archon Books, 1979), p. 93.
12. *Nature's Economy*, p. 104.
13. *The Frail Duration*, p. 17.
14. *Nature's Economy*, p. 110.
15. Willard H. Bonner, *Harps on the Shore: Thoreau and the Sea* (Albany: University of New York Press, 1985), p. 3.
16. 『神曲』, p. 4.
17. 野島秀勝『自然と自我の原風景 (上)』(南雲堂, 1980), p. 321.

18. *Thoreau's Seasons*, p. 133.
19. R. P. Adams, "Romanticism and the American Renaissance"  
*American Literature*, 23, (1952), p. 420.
20. 『人間——過去・現在・未来(下)』, p. 25.
21. *The Frail Duration*, p. 18.
22. "Walden", p. 80.
23. *Ibid.*, p. 84.
24. *The Shores of America*, p. 294.
25. Richard J. Schneider, "Reflections in Walden Pond: Thoreau's Optics",  
*ESQ*, 21, (1975), p. 68.
26. "The Self and Society in Thought of Henry David Thoreau", p. 193.
27. 貝塚茂樹訳『孔子・孟子』(中公世界の名著, 1966), p. 253.

## 第九章 “The Ponds” と “Baker Farm”

## I

## “The Ponds” —— 美のコスモスを求めて

*Walden* の中心章とされる本章において、作者は自然の最高の姿を映すウォールデン湖の描写にただちに移るのではなく、まず最初に短い前置を載せ、その後ウォールデン湖と近隣にある湖の描写を載せている。冒頭「人間社会とゴシップに飽き、村の友人達を疲れさせてから」(173) と述べる下りは、前章との関連を十分意識した表現である。その後語り手は Milton の “*Lycidas*” に描かれた「新しき、新たなる牧場」(173) にさ迷い、夕食用にコケモモやブルーベリーを摘み、湖畔の自らの小屋に帰って行くのであった。その際「自ら摘まずにコケモモを味わったと思うのは一般的な誤り」であり、「永遠の正義が司る限り、ただ一つの罪なきコケモモとて田舎の丘からボストンの方へ移されることはありえない」(173) と付け加えて、ウォールデンの自然の真価は実際に訪れて触れない限り理解することは不可能であることを仄めかす。ウォールデンの水と同様その心が邪念を捨てた純粋なものであることが大前提であった。そのような人物として、語り手は湖で釣りをする耳の遠い釣人を読者に紹介する。彼が口ずさむ讚美歌は語り手の「哲学と調和し」(174)、釣人と語り手は「とぎれのない調和」(174) を楽しむことが可能であった。「調和」という語が繰り返されているように、ウォールデン湖の特色の一つが「調和」であり、*Walden* を読む読者の心も当然ウォールデン湖と「調和」状態が要求されるのである。しかるにコンコードの住民にとってウォールデンの森の価値は建築用の材木、燃料用の薪、食料用の獲物にあり、湖は商売用の水の価値しかなかった。たとえ湖に釣りに出かけたとしても、彼らは「湖そのものを釣る」(213) 釣針はもっていなかったのであった。語り手は本章を通して住民の意識と全く異なる湖の存在意義を徹底的に究明し、神に最も近い場所としての湖の存在意義を披露するのであった。

だれもいない時彼は独り湖にボートを浮かべ、フルートを吹く。時々月明かりの深夜魚釣りをする。そのような時一瞬の悟りの境地に達するのであった。「暗い晩は特に、思索がこの世界を離れて宇宙創成的な問題に馳せた時に、夢想を破って私を再び自然と結びつけるこのささやかな衝撃[魚が引く感触のこと]を感じるのにはなはだ奇妙であった。私は今度は釣り糸を、この空気よりは濃いとは思われない水におろす (downward) ばかりか、空中に投げ上げ (upward) てもよいような気がした。こういう具合で私はいわば一本の釣り糸で二匹の魚を捕まえたのであった。」(175) 静寂とした孤独の中、この世的問題を離れて宇宙創成的な問題、おそらくは神の問題へと想いを馳せていたに違いない。そのような時彼は釣り糸がぐいと引いて魚が針にかかった感触を覚えたのだ。この時の語り手の境地は「一本の釣り糸で二匹の魚を捕まえた」というメタファーに具象されているように、*Walden* の世界を理解する上でも重要な悟りの境地だったのである。なぜなら彼は「天地の間に位置し、両方の色を帯びる」(176) ウォールデン湖において upward な天上的な世界と downward な地上的世界の両方の特質を体得できたからである。ここに至って “Where I Lived, and What I Lived For” の最後で述べられた「空で魚釣りをしたい」(98) という一文が、精神的なものを追求したいという語り手の願望を表したものであることが理解されよう。それにしてもこの釣りのメタファーによって提出された「天と地」の問題は、どちらの世界にも熱い想いを抱く語り手の精神状態を最もよく示すものであり、Thoreau の人となりや作品の統一的要素の一つなのである。実は Thoreau がしばしば誤解され、彼の実像が完全に把握されえない主原因がここにあると思われる。人々は彼のとる極端な天と地の二面性に眩惑され、その一面性のみで評価しようとする。その結果、的外れな虚像が次から次へと形成されてゆく。彼の心には天と地が共存する。こ

のことを忘れてはならぬのである。もちろんこの共存にはしばしば自らの激しい葛藤やディレンマを相伴するのがつきものであるが、彼はあえてそれらを甘受してまで天と地の両方向へ視線を向ける。まるでそれが人間として生まれついた宿命でもあるかのようにである。最終的に彼は自らの心の中で天なるものと地なるものの均衡がとれ、内なる人間性が統一された状態——「全体的な人間像」——を考察の対象としていたように思われ、*Walden*の語り手はまさしくそのようなヴィジョン確立に向かって進んで行くのであった。この意味において“*The Ponds*”の序文として書かれた上記の引用の一節は、*Walden*全体の中でも極めて重要な意味をもつのであった。

McElrathによれば<sup>21</sup>、“*The Ponds*”において語り手は明らかに相対立する人生の弁証法的状況に直面し、それを統合、統一しなければならぬと考えている。このような状況は今までに既に三度現われ、“*Sounds*”においては自然の世界と、鉄道が象徴する機械の世界との葛藤を克服せねばならなかった。“*The Bean-Field*”では自然の世界と文明の世界を一体化したこと。“*Visitors*”においては自然さの面では賞賛できるのだが、精神性に欠ける樵が描かれた。語り手は自らの自我に自然なるものと精神的なものの両方を望んでいたので、樵には不満で、それゆえ「一本の釣り糸で二匹の魚を捕まえた」という“*The Ponds*”の一節は、まさに語り手が最も望んでいた境地に達したことを意味するのであった。またこれはウォールデン湖においてのみ可能なことだった。なぜならウォールデン湖は「陸と空の間にあり」(188-189)、「大地と天の中間に横たわり、両方の色を帯びて」(176)いたからに他ならない。また“*The Pond in Winter*”において「ウォールデンの水はその水と同様、近くで見ると緑色を呈していたが、離れて見ると美しい青色であった」(296、傍点筆者)と形容される。このような場所は、メインの森やコッド岬などのwildernessには見つけることはできなかった。ここは作者のディレンマの一つを少なくとも和らげてくれる所である。彼は最初自我にのみ忠実に生きようとし、自我が唯一歓迎されうる自然の中へ飛び込んで行った。しかし詩人として作家として自我の要求にのみ従って生きてゆくことと、一村民として生きることの両方を完全に満足させることは本質的に不可能であり、またそうした行動そのものがはたして人間として理にかなったものなのかどうか疑わしく思い始めていたのであった。その点自然と文明、天と地の両方の世界が透視できる中間地点は、人間の意識形成(最終的には人格の統一)上この上なく相応しい場なのであった。ここで天と地の両方を目指す主体的な洞察者の道を進む必要をひしひしと作者は感じたに違いなかったのであり、まさにウォールデン湖が天と地の二つの要素をもっているがゆえに、ここへやって来る意義があったともいえるのである。

第5節からウォールデン湖の詳細な描写に移るが、本章及び“*The Pond in Winter*”における溢れんばかりの情熱がこめられ、ある意味で偏執的とまでみなされるおそれのある緻密な描写は、あくまでもリアリティーの世界を見極めたいと欲する作者の姿勢を反映したものである。そのため必然的に“*Economy*”の章と同じく事実の要素が多くなり、科学的客観的側面もそれに応じてふえてくる。湖の規模から始まった描写は、その深さ、色彩、澄明度、温度、湖面の干満、岸辺の石、ウォールデン湖の名前の由来、魚、鳥、動物、周囲の森に至るまで、いわばウォールデンを構成する自然を一つ一つ解明するかのように連綿と続く。確かにここには紛れもなく“*Economy*”で描かれた事実の世界が展開する。しかし決定的な相違は、一つ一つ取り上げられた事実が、いわゆる“*Economy*”のようなアピアランス(仮象)の産物ではなく、すべてがリアリティー(実相)につながるものなのであった。

EmersonはThoreauを評して、「大切なのは事実ではなく、事実がこちらの精神に与える印象、あるいは効果だということを彼ほどよく心得ている者はひとりもいませんでした。あらゆる事実が彼の精神の中で輝きに包まれてあり、全体の秩序と美とを表す象徴になっていました」(Wr, 1:xxx),あるいは「たった一つの実事から彼ほど迅速に普遍的法則を描写した天才を私はひとりも知りませ

ん」(Wr,1:xxxii)と述べているように、Thoreauの描き出すリアリティーに満ちた事実は必然的に象徴的色彩を帯びる。したがって“*The Ponds*”で描かれる湖の様々な側面や要素は、文字通りに解釈することは許されず、象徴や神話の意味を読みこむことが要求されるのである。彼自身はいわば「身の周りの世界で発見した事実を使って自己発見のメタファー」<sup>22</sup>造りをしていたのである。

語り手はウォールデン湖の描写を始めるのに際して、「ウォールデンの風景はひかえめな規模で、大変美しくはあったが雄大というには遠く、また長い間訪れるなりその岸辺に住むなりした者でなければ深い関心はもてない」(175)と一言断っている。確かにウォールデン湖の岸は「不規則」(185)で、自然界に見出される形として最も完全なものであると考えられている「円」とは多少異なる。しかし象徴として「彼[造物主]は自らの手でこの水を丸くした」(193)のであり、「その岸辺に立ち返る人にとっては、象徴的な円もしくは中心性をもつ」<sup>23</sup>のであった。他の多くの人々が「際どい所に立っている (on the limits)」(6)のと比べて、語り手は万物の中心に確固として立っているのであった。*A Week*の語り手は常に動いてやまぬ川にボートを浮かべていたのに対し、*Walden*の語り手は安定した湖畔の小屋にいた。この決定的な視点の差がそれぞれの作品の構造を支配する。中心性ということに関しては、riverやboatと比べpondやcabinの方が遙かに相応しく、極めて明示的な舞台設定を作り出している。

ウォールデン湖は川の水が流入する湖ではなく、「雲と蒸発とによるほかは入口も出口も見あたらず」(175)、「湖底から泉が湧いてくる」(189)「永遠の泉 (a perennial spring)」(175)と称され、文明の一切の夾雑物が削ぎ落され、世俗を超越した天が与えた自然の中の理想郷、「完全という最も高度な地上のイメージ」<sup>24</sup>を喚起する。それはいわば宇宙の統一原理としてのコスモス(美と秩序と配置の妙)が最も完全に表された姿を読者の前に提示することでもある。具体的に言えばウォールデン湖は5つの特徴——(1) 純粋性 (purity), (2) 深さ (depth), (3) 神性 (divinity), (4) 調和 (harmony), (5) 永遠性 (eternity) をもって読者をカタルシスに誘い、読者はこの湖をモデルとして自ら「真の完璧さ (a true integrity)」(6)を目指して努力せねばならないのであった。ただ以上の5つの特徴の中で、自然の特性を最もよく示す野生 (wildness) が意図的に落されていることに注意せねばならない。なぜなら野生の問題を取り上げると、語り手自身の悩ましい胸の内をそのまま暴露することになりかねず、本章の趣旨と著しく反することになるからである。したがってこの問題は先送りされ、2章後の“*Higher Laws*”で徹底的に検討されることになる。以下ウォールデン湖の5つの特徴を互いに関連させながら述べてゆくことにする。

(1) purity — 「私が知っているすべての人物の中で、多分ウォールデンは一番昔の面影を失わず、その純粋さ (purity) を獲得しているものである。多くの人々がそれに喩えられたが、その名誉に値する者は少ない。」(192) この一文ほどウォールデンの純粋性を物語る表現は他には見あたらないであろう。*Walden*を通して pure, purer, purify, という語が頻出し、“*The Ponds*”では実に17回も使用されている。その他それに類した表現 (clear, crystalline, transparent, clean) などを含めれば、その数は相当なものになるであろう。これは裏返せば、現実世界においていかに不純物 (impurity, appearance) が多いかを暗示させ、事実読者は今までいやというほどそれを見せつけられてきたわけであるが、*Walden*という作品がその不純物を一つ一つ取り除いてくれるような気がするのである。それはまた裏返せば読者の汚れた意識が徐々に清められることをも意味するのは当然である。本章に入って「澄んだ深い緑の泉 (a clean and deep green well)」(175)、「松と樅の真ん中にある永久の泉 (perennial spring)」(175)、「水晶のように澄む純粋さ (crystalline purity)」(177)、「素晴らしい純粋性 (wonderful purity)」(194) というような表現、更に「ウォールデン湖は、宝石と見紛うばかりの小石を周囲に散りばめた森の鏡そのものである。湖ほど美しく

清らかで、しかも広々としたものは……大地の表面には横たわっていないだろう。……それはどんな石も割ることができない。その水銀は決してはげることなく、自然がたえまなくめつきをかけている鏡である」(188)の一節に出くわし、それこそ心が洗われたような印象を受ける。「心が洗われる」というのは purification のことなのだが、既に述べたように語り手が湖で水浴するのは精神と肉体の浄化の儀式の一つであった。この儀式は、マックラス・インディアンの火による浄化の儀式同様、「内面的な精神的な神の恩寵の、外面的で目に見える表現」(69)としての「聖なる儀式 (sacrament)」に相当する。読者はそれを直接体験できなくても、本文で喚起された purity のイメージに触れることで、聖なる世界に一步近づくことが可能となるのである。

ウォールデン湖は自然の四大(地、水、火、風)と密接な関係によって成立しているが、とりわけ水のイメージは重要となる。なぜなら水こそ湖の存在理由を決定づけるものであり、必要な時には洪水をおこすことで侵略者から自己を守り、その液体性ゆえに人々から「宝石」のように盗み去られることもないし、また燃えることもない。この意味で水は不朽なものであるといえる。<sup>55</sup>したがって「近くに水をもつことはよいことである」(87)と語り手が言及していたのは、そういう意味をこめてのことだったのである。更に水の特色を補足すれば、他の要素(地・火・風)と異なり、純粋な水は光を吸収するゆえに「大地と天の間に横たわって両方の色を帯び」、「天上の露の蒸溜所 (distiller of celestial dews)」(179)となり、また光を反射することで「地上の天となる (the water, full of light reflections, becomes a lower heaven itself)」(86)こともでき、ウォールデン湖の「水は文字通り空の青さを反射するばかりか、比喩的に言えば天を地にひきおろすことさえも可能なのであった。」<sup>56</sup>この意味で「湖は大地の眼であり、それを見る人は自らの心の深さを測ることができる」(186)のである。湖においては「浄化の作用は絶えず行われている」(213)ので、人はその無垢な湖面に映った自己の姿と本当の自我を照らし合わせて、「静かなる絶望の生活をやめて、真理の創造的反映者 (creative reflectors of truth)」<sup>57</sup>へ変身する道を歩まねばならぬのであり、それを教えるのが洞察者としての語り手の役割だったのである。

(2) depth—語り手は色彩の変化によってウォールデン湖が刻々とその姿を変えることを示した後、彼にとって最も重要な意味をもつと思われる湖の底に話題を移してゆく。彼にとって重要な意味をもつというのは、ウォールデン湖に底があるのか、それとも住民が考えているように底がないのか (bottom or bottomless) を確認した上で論を進めて行かないと、不用意な誤解を招く恐れが多分にあったからである。もっともこの件に関して作者の態度は両義的である。なぜなら bottom は「我々が真実と呼ぶところの堅い岩 (a hard bottom)」(98)、あるいは「どこにだってしっかりした底はある (There is a solid bottom every where.)」(330)と使用されているように、アピランスの洪水の中で語り手のリアリティー探求の確固とした位置付け上重要なイメージを形成しているからである。一方 bottomless はその使用数は bottom と比べ遥かに少ないものの、作者の内奥に潜む wildness 願望と結びつく。例えば“Visitors”の中で登場する森の樵は、「ウォールデン湖がそう思われているのと同じように底知れない (bottomless) 天才的人物が存在するかもしれない」(150)と述べられて、その野性的魅力が称えられた。また bottomless は無限の想像力のイメージを喚起してやまない。このように bottom あるいは bottomless のイメージは、作者は巧妙に使い分けるが、文字通りのイメージで解釈されるとしばしばアンビキュアスな結論を導き、読者を戸惑わせることこの上もない。湖に底があるのか、それともないのかの判断は、表向き夏よりは冬の方が測量が容易という理由で“The Ponds”では避けられ、“The Pond in Winter”に先送りされることになった。本章で bottom かあるいは bottomless かという明確な結論を下すことにより、これから述べようとする湖の特性を損なう恐れが多分にあると考えて、意図的に避けたのであろうと思われる。

ウォールデン湖の湖底は浅い所では「清らかな砂」(179)、深い所では「少しばかりの沈澱物があり、それは長い間年々の秋に落葉がたまつたものであった。」(179)しかしこの湖底から「あざやかな緑の葉が真冬でも錨にくっついて引き上げられることがある」(179)と付け加え、自らの意識も閉ざされがちな真冬においてさえも湖の深淵部では春がその生命を維持しているという事実を述べて、“The Pond in Winter”の伏線としている。

この後語り手は湖底にまつわる神秘的な世界を読者に披露する。砂地の湖底にはある規則的な石ころの山があった。ここはウグイが巣としている所だが、なぜこのような石の山が作られるに至ったのか謎のままであった。しかしそれが「湖底に面白い神秘的雰囲気を与える」(185)のである。更に語り手は約60年前しばしばこの湖を訪れたことのある古老の話を紹介する。彼によれば、所有者のわからぬ古い丸太のカヌーがあり、長年もった末水びたしになって湖底に沈んでしまったと言う。語り手はこの話を聞いて、「それは多分初め岸にはえていた木だったのが、水の中に倒れ落ちるかして一世代の間漂つたものらしく、この湖水には最も相応しい舟であった」(191)と語る。湖は森の姿を映すばかりか、その精神までも育むのであった。このように湖と森は、詩人と自然がそうであるように元来分かち難い「兄弟」であることを読者に納得させる。語り手は更にもう一つの神秘的な話を紹介する。昔この湖底には鉄の箱があり、「時折岸辺に漂つて来たが、人が近寄るとまた湖底深く消えて見えなくなった」(191)というのである。ウォールデン湖には確かに人を寄せつけないbottomlessな要素があるように思われる。しかし一方自然の秩序の中で生きるアビは難なく「その湖底(bottom)を訪れることができる」(235)のを知って、語り手は自然と人間との捉え難い距離を見せつけられる思いをしたのであった。depthに関するより深い究明は、第16章の“The Pond in Winter”においてなされることになる。

(3) divinity — 「AdamとEveがエデンから追放された時」(179)天と地が分かれ、人間は神と自然との調和的關係を捨て、二元的な分裂の世界へと墮落の道を歩み始めた。その時既に存在していたウォールデン湖は随所に神々しい特性を秘め、“Where I Lived, and What I Lived For”では「地上の天(lower heaven)」(86)、本章では「地上における唯一のウォールデン湖たること、そして天上的な露の蒸溜所たることの特許を天から得て」(179)、「空の水(sky water)」(188)「空の霊」(188)「神のしずく(God's Drop)」(194)と形容される。“The Pond in Winter”では、「天は頭上ばかりか足下にもある」(283)と言及されている。人々は「この湖を見ることによってより善い人間となる」(193)ことができるのである。語り手は“Economy”で「人間の神性を語ろう」(7)と呼び掛け、“Where I Lived, and What I Lived For”で「一億人に一人しか目覚めた詩的で神性な生活を送っていない」(90)と強調したが、彼の意識下には神性のパラダイムとしてのウォールデン湖があったことは間違いあるまい。実際、エデンの時代から存在し、「この湖が詩神の飲むカスターアの泉となり、理想の黄金時代(Golden Age)に水の妖精が支配していた」(179)と描写されるに至って、ウォールデン湖はコンコードにある一湖から神話的雰囲気醸し出す普遍的湖へと変容する。

ここでウォールデン湖が「理想の黄金時代」に喩えられているのは注目に値する。なぜなら“Spring”の章で詳しく説明されているように、黄金時代はとこしえの春が続くエデンで、それは無限の完璧さを象徴し、作者の理想とする世界に他ならないからである。楽園を喪失した後の人間にとって「切なる望みと目標は、その失った至福の状態と原初の統一を回復すること」<sup>38</sup>にあったのは、作者も重々承知の上のことである。彼は黄金時代のイメージに憑かれ、それゆえOvidの*Metamorphoses*を引用して“Spring”の中心に据えたのであった。Thoreauは19世紀における黄金時代のイメージをウォールデン湖に見出し、楽園的特質を必死になって描写する。それはかなりの程度まで成功し、事実“The Ponds”に限って言えば、神性の存在と目的に満ちたウォールデン

湖は「アルカディア (Arcadia)」(57)なのである。ウォールデン湖の名前の由来に関して作者は「壁に囲まれた湖 (Walled-in Pond)」(183)を紹介している。このことは湖の周囲が小高い丘に囲まれ出入口がないと既に述べられていたことから察しがつく。そもそも楽園 (paradise) の語源を辿れば、「古代ペルシャ語の pairidaeza, すなわち『囲われた場所』」<sup>19)</sup>なのであり、この意味でもウォールデンはもともと楽園に相応しい場所なのであった。

ただいかんせん19世紀の楽園は、「明白な宿命」という時代精神の下、鉄道の開通、森林の伐採、氷切りなどによる物質文明の侵略を受けて堅固な壁も破られようとしていた。なぜこういう状況になっていったのか、その原因を探っていけば必ずといってよいほど自明の事実突きあたる。それは結局人間が常に介在しているからであり、最終的な責任は自然ではなくすべて人間の方にあるのだ。こうした事態を鑑み、作者は完全な人間性の確立に執念を燃やすことになる。これは *Walden* 執筆段階で徐々に暖め続けられてきた構想で、この中で人々は「神性な存在が確立され」(220), 「聖なる変身」<sup>20)</sup>を遂げることが必要とされるのであった。この意味で *Metamorphoses* の「黄金時代」の中で描かれた人間の本来あるべき姿——人間は神や大地の種子を具現すべき存在である、すなわち「人間の神性 (divinity in man)」(7)——が *Walden* の最大の主題として作者の念頭におかれていたのは間違いなからう。

語り手はウォールデン湖の名前の由来に関してインディアン伝説をもちだし、「その昔インディアンたちは、今日湖の中に深く沈んでいるだけの高さで天に向ってここに聳えた山の上で会議を開いていたが……話の最中に山が揺れ出し突如として沈み、ただ一人ウォールデンという名の老婆だけが助かり、湖はこのことにちなんで名づけられたのであった。……このインディアン伝説は、私が前に述べたあの昔の移住者 (that ancient settler) の話といかなる点においても矛盾するものではない。彼は初めて占杖を手にもってこの地に来た時のことを実によく記憶しており、芝土から微かな蒸気が立ち上り、ハシバミのその杖がしっかりと下の方を指し示すのを見て、ここに泉を掘ることを心に決めたというのである」(182)と述べる。この話はまさしく「ウォールデン湖の寓話的性格を高めるために特別に考え出された」<sup>21)</sup>に相違なく、ウォールデンは限りなく神性に近い湖となってゆくのであった。

(4) harmony——美のコスモスの世界。湖は「どんな石でも割ることができず、その水銀は決してはず、自然が絶え間なくめっきをかけている鏡である。どんな嵐でもどんな塵もいつも新しいその表面を曇らすことはできない——それに加えられるすべての不浄 (impurity) は沈んでしまい、太陽の打ち霞むブラシで払いのけられてしまう鏡」(188)のイメージで捉えられる。この湖面をミズスマシやアメンボウが滑走し、その上をツバメがかすめて飛んで行く。一方浮いているアザミの綿毛に魚が飛びつき、水面をくぼませる。魚が空中に弧を描いて湖面全体の平衡をかき乱すが、その波紋もやがておさまり、静寂が訪れる。語り手はこのような湖で行われる様子を観察しながら、自らの心もそのような静謐な境地に達しつつあることを知る。「湖のもろもろの現象は何と平和に満ちていることだろう！再び人間の仕事は春においてのように輝く——そうだ、すべての葉、そして小枝、石、クモの巣は今、午後の中ほどにおいて、春の朝の露に濡れているように光っている。櫂の一つ一つの動きも虫のそれも光のひらめきをつくる、そしてもし櫂が水に落とされると、ああ、何という美しい反響！」(188) *Walden* の描写の中でも最も穏やかで平和に満ち、春、朝、光のイメージがふんだんに使用されたこの一節から、読者は語り手が再度エクスタシーの境地に迷い込んでしまったかのような印象を受ける。もっともここで強調されているのは、語り手が湖と共に生きる生物、植物、いや人間をも含むすべての被造物と崇高な関係を維持し、調和と秩序のとれた美のコスモスの世界を構成しているということであり、彼自身もその中にいることを実感してこの上なく幸福に感じている事実である。この至福の境地が、“Solitude”と同様に「この落ち着きのな

い、神経質で、せわしない、こせこせした19世紀」(329)の、“Economy”の腐敗と無秩序のカオス的世界のアンチテーゼとしてのウォールデン湖を要約しているように思われる。

本章が *Walden* の中でも中心を占める最大の理由は、ウォールデン湖が最も望ましい自然の特性を兼ね備え、調和と秩序を形成しているからである。語り手はそのウォールデン湖に宇宙の統一的世界の原点を見出している。それは簡潔に言えば、何ひとつとして全体から離れて存在しえないという自然の見事なまでの有機的統一性である。彼は自然の多様性の中にある統一性を探求し続け、自らを不断に完成させるためにもその拠り所をここに見出したのであった。彼はこの湖にならって統一的な人間性を陶冶しようとする。なぜなら、Emersonの言うように「この世界が統一性を欠き、散乱し山積みになっている理由は、人間が自分自身と分裂しているからなのである。」(CW, 1: 43, 傍点筆者) こうした断片的、分裂状況からは何も創造的な生き方は生まれるはずもなく、人々は物に囚われ、「日に日に自らの真の完璧さを失い」、「道具の道具」に墮した例は、今までいやというほど見せつけられてきた。彼らは神を敬うことなく、自らの魂でさえ売りとばしかねなかった。かつては神聖な農業の担い手であった農民でさえ「自然を泥棒としてのみ知る」(166) 有様であり、風景は彼らによってすっかり「醜悪にさせられてしまった」(165) のであった。このような中、語り手は精神の分裂、束縛状況を脱し、有機的で全体的な均衡のとれた人間像を理想として掲げるに至った。その際多くの人が学ぶべき姿勢は、「我々の生活より遥かに美しく、我々の人格 (characters) よりいかに遥かに澄明である」(199), 「最もその純粹さを維持している」(192) ウォールデン湖の特性を知り、できるだけそれに近づこうとする努力である。これらの引用の中で使用されている character は、既に指摘したように *Walden* の中でもとりわけ重要な語と考えられ、人間性や人格の完成を切望する作者の心情が最もよく反映されたものと思われる。

(5) eternity — ウォールデン湖は「永遠の泉 (perennial spring)」(175), 「永遠に若い (perennially young)」(193) と形容される。“Reading”の言葉を使えば、それは immortality であろう。語り手によれば「人間が手を加えた跡は僅かしか見られず、水は一千年前と同じく岸を洗っているのである。」(186) また「ウォールデン湖自体は少しも変わらず、私の若い頃の眼が注がれたのと同じ水を湛えている。すべての変化が私の中にあるのだ。それは永遠に若く……ああ、ここにウォールデンがある。幾年も前に私が見出したままの森の中の湖水なのだ。」(193) 「すべての変化は私の中にある」と語る時、「私は自分が生まれた日にあったほど賢くはない」(98) のであって、ウォールデン湖の不滅性と比べて語り手自身の、いや人間精神というものがいかに脆弱でうつろいやすいものであるか思い知らされたに違いない。だがすべての変化は必ずしも否定的なものばかりではない。実際湖面を眺める語り手は、「それをのぞきこんで自分自身の心の深さを測り」(186), カタルシスの作用を受けて、昔のままの無垢なものがいまだに自らの心に残っていることを知って安堵したはずなのだ。この意味で湖は永遠の救いの場なのであった。

Thoreau は *Journal* の中で、「ああ！自分の人生の中で散漫な瞬間がないように生きてゆければ……自然といつも自分の気持を一致させることができれば……季節ごとに自然のある部分が特に成長し、それに応じて自分の部分が必ず成長すればよいのに」(PJ, 3: 368) と語っている。これは Goethe や Emerson が主張する「自然と人間の完全な対応関係」を述べたものだが、こうした中でこそ「人間は自然の中でくつろぐことができるのである」(J, 10: 127) と付け加える。Thoreau にとってウォールデン湖は「神からの確固とした保証と安全」(131) が与えられた、唯一の覚醒、かつ創造的生活の場であったのだ。

語り手はこの湖にボートを浮かべ「無為 (idleness)」を楽しんだことを思い出す。無為とはピューリタンの倫理観からすれば勤勉に反し、罪悪視される類のもので、怠惰と同じ意味に住民には思われたに違いない。しかし彼は「無為が最も魅力的で実りのある仕事であった……私は金銭において

ではなく、うらかな時間と夏の日において豊かであり、それを惜しげもなく使った」(191-192)と述べる。彼の語る無為とは、決して怠けてぶらぶらすることではなく、エクスタシーに至る重要な過程なのである。それは以前「私は人生の幅広い余白を愛する」(111)と語った時の、その「人生の余白」に相当するものである。それは決められたり、踏みならされたりした道を歩むのではなく、自然の中に分け入り、その生きているリズムの中に浸ることを意味するのである。これは明らかにエクスタシーの境地に他ならないが、エクスタシーの境地は最終的には時間を超越した永遠の世界でもある。作者は今までに幾度となく「永遠性」について仄めかしてきたが、読者の方は来るべき後の章のどこかで「永遠」についての作者の最終的な判断が下されることを期待するのである。そのような期待は、作者がウォールデン湖の「明」の部分から「暗」の部分に視点を移すにつれて、一層高まってゆく。ウォールデン湖の「暗」の部分については既に触れたように、その最大のものは目に見える「鉄道」と目に見えない「制度」の二つであった。しかし事態は一層深刻であり、樵が森の木を切り、アイルランドの移民が岸辺に豚小屋を建て、冬には凍結した湖の氷を切りに氷切り人夫が多勢やって来る。更にはコンコードの住民が「ガンジス川と同じくらい神聖な水」(298)を清めのためではなく自分達の飲料水として、パイプを家まで引こうともくろんでいた。その他にも貪欲な狩猟家や釣人の存在が挙げられる。「私がああ岸を去って以来、樵は更に一段とそこを荒らし……私の詩神はその後沈黙し続けている。森が切り倒されたのに、どうして小鳥が歌うのを期待できようか」(192)と悲痛な想いで叫ぶのも至極当然なのである。

特に鉄道については、“Sounds”と同じく本章でも水を汚し森を食い尽くす「悪魔の鉄の馬」(192)と形容されていることからして、迫り来る機械文明の中でも最大の脅威と感じていたことは間違いない。「汽笛が鳴ると私は線路を避けて汽車を通さなければならない」(122)と述べ、結局のところ妥協して鉄道に道を譲っていた。しかし“The Ponds”では「あの商人根性のギリシャ人にもちこまれた、その腹に一千人をひそませているトロイの馬、ディーブカットの踏み切りで迎え撃って、この思い上った悪獣の肋に復讐の槍を投げつけるこの国の闘士 Moore of Moor Hall はどこにいるのか？」(192)とその非難のボルテージを一段と高くするのである。Moore of Moor Hall というのは英国の古いバラードに登場する、ドラゴンを殺した英雄のことだが、はたして19世紀にこの鉄道という怪物の息の根を止める英雄が存在しうるであろうか？ 作者はその問いには直接答えようとはしないし、自らも率先して鉄道反対を唱えるのでもなかった。ただし、執拗に物質文明の発展と人間性との関連性について問題提起をしてきたことは確かである。その際人間が原始の野蛮状態に回帰すべきなどという論は問題外として、文明の発展に伴った相応しい人間性の成長を切に望むのであった。時代の支配的原理が物質優先主義の中で、人間の魂の方はすっかり忘れられた存在になってしまっていた。この魂に息吹を吹き込み復活させることが、今や作者の最大の関心事となっていたのである。

後年 Thoreau は現実に進むウォールデン湖の自然破壊に関して具体的な提言をせざるをえなくなった。みすみす自然が破壊されるのを黙って見ているわけにはゆかなかったのである。それは *Walden* が出版されて後のことだったが、コンコードの中でも貴重な原生林が切られ、そこに住む夥しい数の動物の生息地が奪われ、種の危機に瀕している中で、ウォールデンの森全体を自然保存地区に指定すべきことを切々と訴えるものであった。「どの町も500あるいは1000エーカーの公園、もしくは原生林をもつべきで、そこでは一本の枝も燃料のためには切ってはならず、教訓とレクリエーションのための永遠の共有地とならねばならぬのである。……すべてのウォールデンの森は、ウォールデン湖を中心にしていつまでも公園として保存されるべきであり、約4平方マイルの未開拓地であるエスターブルックス・カントリーは我々のハックルベリーの野原となつてしかるべきである。」(J, 12:387) だが他方この認識は皮肉にも人間が自然を守ってやらねばならなくなったこと、すな

わち自然と人間の対等な関係、「兄弟の関係」が崩壊してしまった悲劇的状况を鮮明にするものでもある。人間の助力なくしてはもちこたえられなくなってしまった、いわば公園の柵に入れられてしまった自然は、もはや自然とは呼べぬかもしれない。アメリカの自然保護思想の先駆者的存在であった Thoreau であるが、それはやむにやまれぬ苦渋の選択であったことを見逃してはならない。晩年彼が野生的自然への傾斜を強めていった背景に、こうした迫り来る自然破壊への警鐘を読み取ることができよう。

実際の *Walden* にはそのような自然を保護する提案はなく、それに代わるものとして語り手は自然の再生力を前面に出して、自然の偉大な生命力を称えている。彼は「森が切り倒された跡に勢いよくもう一つの森がその岸辺に生い立ちつつある」(193) 事実を目撃し安堵する。この事実は後の“Spring”の章で一層深い象徴性を帯びることになるが、語り手にとってこの自然の再生の様子はとりもなおさず自然の「創造主 (Maker)」(193) たる存在を思い起させるのであった。ウォールデン湖が「何の悪だくらみもない立派な人の造ったものに違いない！彼 [創造主] はこの水を彼の手で丸くし、彼の想いのうちでそれを深めて清らかにし、彼の遺言でそれをコンコードに残したのだ」(193) と形容される時、ウォールデン湖はマサチューセッツ州コンコードにある一湖以上の意味がこめられている。「Thoreau の描いたウォールデン湖は実在するが、それを書いた人の心にもみ存在する想像上の場所でもある。彼にとってウォールデンは象徴的存在であり、人間が造り上げた人工の世界より遥かに優れていると思われる自然界の真髄を意味している。」<sup>212</sup> 更にそればかりか、明らかに神性に近いものを身につけているように思われたのであった。“The Ponds”の中に引用した作者自作の詩が、それを端的に物語っているのである。

一つの線を飾ることも  
 私が夢にも思わぬことだ、  
 私はウォールデンのそばに住んでいる時  
 最も神と天国に近づくことができる。  
 私はその岸の石の河原、  
 そこをわたるそよ風だ  
 私の手のひらのくぼみにはその水と砂がある  
 そのいちばん深いかくれがは  
 私の想いのうちに高く懸かる。 (193)

ウォールデン湖は語り手にとってその純粹性、深さ、神性、調和、永遠性において完璧なまでの自然の世界を映し出しているように思われた。それは彼が必死になって探求し続けていた真・善・美の調和と均衡のとれたコスモスの世界に他ならず、彼は「カオスからコスモスが創造され、黄金時代が実現された」(313) ように感じ取ったのであり、更にこの世界に近づくには自らも進んで深く、深く、神性で調和的、永遠志向をもたねばならぬことを痛感したのだった。*Walden* はまさにこの語り手の自らを不断に完成してゆこうとする人間的成長、それも「自然と神の両方に受け入れられる生き方」(C, 247)、天なるものと地なるものの均衡を計りながら、簡素な生活と高き想いを実践する語り手の全体的な人間へのメタモフォーシスを扱った作品と定義しても過言ではあるまい。

“The Ponds”の章はその複数形からもわかるようにウォールデン湖だけを扱ったのではなく、周辺の小さな湖にも言及する。語り手が湖水地方と呼ぶコンコード周辺の河川や湖沼のうちで、その名に値しない、いわば *Walden* の「暗」の部分の最たるものがフrint湖の存在であろう。彼は

“Where I Lived, and What I Lived For”で「オリンパスの神山は俗世を僅かに離れて至る所にある」(85)と述べ、理想の世界は読者の身近にあることを繰り返し訴えてきたが、皮肉にも「最も神と天国に近い」湖の隣におぞましきフリント湖が存在していたのである。いやフリント湖自体には何ら責任はない。むしろそれを私有している人間がその湖の数ある特性を奪ってしまったのだ。このフリント湖はウォールデン湖よりも「高い所」(194, 傍点筆者)にあり、これら二つの湖が地下で結びついているのではないかという一抹の不安が語り手の脳裏を横切った。(ちなみに現代の調査によれば、これらの湖は地下水脈でつながっている。)彼には二つの湖がまがりなりにも結びついてもらっては困るのである。なぜならフリント湖は理想的なウォールデン湖の対照的存在として、あくまでも否定的な「暗」の湖でなくてはならぬからである。語り手はフリント湖はウォールデン湖よりも遥かに広く、多くの魚にも恵まれているが、「浅く、あまり澄んでいない」(194)と形容し、深さと純粹さにおいては見劣りすると語る。彼が岸辺を散歩していると、ボートのくずれた残骸(wreck)に行きあたり、「それは海岸にでも想像できそうな難破船に劣らず印象的で、また同じような善い教訓をもっていた」(195)という印象をもつ。ウォールデン湖にはそこに相応しい神秘的なカヌーの話が登場したが、彼がフリント湖で見出したものは船の残骸であった。難破船のイメージはCape Cod第1章“The Shipwreck”を思わせ、明らかに不吉な死のイメージを喚起させる。その後のフリント湖の描写が明示しているように、精神的な死という「教訓」が読者の前に提示されることになる。彼が散歩中に気づいたもう一つのフリント湖の事実は、「こまかい草または根のかたまりでできているような奇妙な毯」(195)の存在である。この毯藻のような存在は、ウォールデン湖で見られた純粹性、深さ、神性、調和、永遠性のどのイメージに昇華することもなく、「浅い水の中で前後に揺られ、時々は岸に投げ上げられ」(195)てしまう。乾かしておくといつまでもその形は保たれるが、湖の中では波によって「すり減らされる」(195)始末で、神秘的なものには違いないが、作者の想像力の中では高尚なものへと飛翔することがないままに終わってしまった。

ウォールデン湖のその高貴な名前の由来とは対照的に、フリント湖はこの近くに住む「不潔で愚かな農夫」(195)の名前からとられたものであった。このFlintという人物こそ、語り手が繰り返し批判の対象としてきた「静かなる絶望の生活を送る」人間の典型であり、語り手はこの湖の名前をより高貴で価値ある人の名前、あるいは「その水に泳ぐ魚の名、そこを訪れる野鳥か四足動物の名、その岸に咲く野の花の名、またはその生涯の物語りの糸がこの湖のそれと織りまざっている野人または子供の名」(196)に変えた方がよいと主張する。しかし問題は名前云々ではなく、湖の価値そのものを「経済性」という名の下でしか考えない人間の意識の方であった。

Flintは湖の金銭的価値のみを重視し、湖に住みついた野鳥さえ邪魔物とみなす「ハーピー [ギリシャ神話、顔と体が女で、鳥の翼と爪をもった強欲な怪物]のような貪欲な男」(195)であった。更に神性さのひとかけらもない、まるで悪霊に憑かれたかのような彼の性格は次のように描写されている——「私は彼の労働を、何から何まで値段のついている彼の農場を尊敬しない。もし幾らかにでもなるのなら、景色でも彼の神様でも市場にもち出したい彼、彼は彼らしい神を仕入れに市場に出かける。彼の農場では何物も無代価では成長せず、その畑にはドル以外には何の実りもなく、その牧場には何の花も咲かず、その樹は何の果実もならさない。彼は自らの果実の美しさを愛さず、彼の果実はドルに換えられないうちは熟していることにはならないのだ。……人間が飼われているところ!……人間の心臓と脳髓とを肥料とした高度に耕作された場所!」(196-197)語り手がこれほどまでにFlint個人を酷評するのは、“Economy”で言及された文明のアピアランスを彼が無垢な湖にもちこんだからである。この箇所はWaldenでは珍しく、怒れる若者として作者自身の私憤が、想像力という濾過装置を経ずに露骨に現れたところである。Journalならともかく、Walden

という文学作品の中で作者の私的感情がそのままちこまれるというのは、よほど腹がすえかねての決断だったように思われるが、裏を返せばかつて Thoreau はこの湖畔にあった小屋で、今は亡き友人 Wheeler と楽しい夏の休暇を過したことがあったからである。その思い出と現実がオーバーラップして、彼は激しい怒りを感じざるをえなかったのだ。この一件は湖ですら人間によって汚される危険性があるという、もはや自明の事実を再度作者に突きつけることになった。この一節は私憤以外にウォールデン湖がフrint湖の二の舞にならぬようにと考える作者の危機意識の表れと読み取ることもできよう。ウォールデン湖の迫り来る危機に関して作者が取りうる実際的な行動は、既に述べたようにウォールデンの森全体を自然保存地域として後世に残し、少なくとも自然を市場価値のある製品としてのみ定義する人々から遠去けることであったが、最終的には人々の意識を変えなければならないことを痛感していたに違いない。そのために *Walden* が書かれたのであり、作者は読者に向かって「我々の人格よりも遥かに澄明な」、「神のしずく」たるウォールデン湖に目を向け、「自分自身の心の深さ」を探ることがいかに重要であるか訴え続け、それに値する人間像を探求し続けて行くのであった。

語り手が湖水地方と呼ぶ中で、ウォールデン湖と双壁をなす湖はホワイト湖 (White Pond) である。そのありふれた名称にも拘らず、ウォールデン湖と地下水脈で通じ、「森の中の宝石」(197) と形容される。彼はこの湖を「ヤニマツの湖 (Yellow-Pine Lake)」(197) と呼んで然るべきだと考える。なぜならかつて湖岸から12~15ロッド離れた水深30~40フィートの所にヤニマツが逆さまに立っていたのを知っていたからである。この木は語り手がウォールデンに来る前に掘り出され、運び去られていたが、それを掘り出した人は語り手との会話の中で、その木は「逆さまになっていて、枝も下を向き、細かい枝先が湖底にしっかりと固定していた。……それはおそらく岸に横たわっていた枯れ木 (dead tree) がいつか湖の中に吹き込まれて、梢の方は水びたしになったが、根元の方は乾いて軽いので、だんだん遠く漂って逆さまに沈んだのではないか」(198-199) と推測した。この「逆き樹」のエピソードを語り手が長々と引用したのは何か理由があつてのはずである。それは岸辺の枯れ木であった木が、水の生命力によって甦ったという事実の中に隠されている。これは枯れ木といえども完全に死にきっていたわけではなく、枝や幹に再生力の可能性を維持していたのである。これを人間のアナロジーとして考えれば、「静かなる絶望の生活を送る」人々であれ、まだ目覚めや変身の可能性が残されていることを暗示する。この木の話は、“Conclusion”の中、リングの木の古テーブルの乾いた袖板から甦ってきた美しい虫の寓話とも容易に結びつく。

このエピソードでもう一つ重要なことは、この木がいわゆる「逆き樹」であったという事実である。普通「逆き樹」は逆転作用を表すシンボル、すなわち「天界が地界の姿を映し、地界が天界の姿を映す」<sup>213</sup>ものと考えられている。とすればこの「逆き樹」という現象の中に語り手は地上にある天界の象徴を読み取ったに違ひなく——ウォールデン湖同様ホワイト湖も「地上の天」である——、純粹で無垢な自然が天と地との中間に位置し、その媒体でありうることを再確認するに至ったのであった。またこの「逆き樹」現象は、更に視点の転換の必要性を暗示する。Emerson が *Nature* の中で「股の間から風景を見て、目をさかさまにしてみれば、たとえこの20年間、時を選ばず見続けてきた光景でも、まったく目に快く映るものである」(CW, 1: 31) と述べているように、Thoreau も Emerson の見方を踏襲して「股のぞき」(186) を実践している。「股のぞき」によって長年見慣れてきたものが全く新しい姿となって眼前に現れる。視点の転換は作者が繰り返し強調してきたものの一つであった。

語り手は“The Ponds”の最後の一節で、ホワイト湖とウォールデン湖の純粹性、神性について再度強調する。これら二つの湖は「地上の大きな水晶であり、光の湖である。……これらの二つの

湖は市場的価値をもつにはあまりに純粹である。それらは何の不浄をも含まない。我々の生活よりいかに遥かに美しく、我々の人格よりいかに遥かに清明であることよ。……ここへは清らかな野鳥が来る。自然は自然を理解する人間の住民をもたない」(199)と述べ、純粹無垢な自然と調和して生きるのは、その経済的な価値のみを考える人間ではなく、謙虚に生きている動植物の方であることを示唆する。そして大地を恥ずかしめるのではなく、「天国を語れ!(Talk of heaven!)」(200)と述べて本章を終わるが、読者に向かって発せられたこの偽らざる本音の言葉が、「人間の神性を語れ!(Talk of a divinity in man!)」(7)とオーバーラップする。*Walden*が始まってほどなくして発せられた「人間の神性を語れ!」がいやがおうでも *Walden* の主題を決定づけたように、*Walden* の丁度半ばにおかれた“The Ponds”で再度読者に向かって発せられた「天国を語れ!」によって、読者は作者の意図が自分たちの意識の変革にあることを悟るのである。

## II

### “Baker Farm”——虹と John Field

前章の最後で言及された、ホワイト湖の中に逆さに立っていたヤニマツのイメージが読者の脳裏に強烈に焼き付き、湖と森の関係が深いことを教えられた後では、新しい章“Baker Farm”に読み進んでも、話が湖から森の樹木に移ることにさしたる違和感を感じることはない。前章が湖を主たる対象としていたのに対し、本章では森が描かれ、そのコントラストは極めて意図的である。本章は文明の章とされるが、森が文明的であるのではなく、そこに住む人間が文明的であるということである。語り手は森をよく散歩する。森の中の散歩は Emerson が *Nature* の中で述べているように、「野生と信仰」(CW, 1: 10)を回復させてくれる。しかし世間一般の人々はそう見ない。Thoreau は「*Walden* の戦術的な論争の相対物」<sup>124</sup>ともいうべき“Life Without Principle”の中で次のように述べている。「もし人が森を愛し、毎日の半分を森の中でぶらついて暮すとすれば、彼はのらくら者のみなされる危険がある。ところがもし彼が、山師として毎日一日がかりでその森の木を伐りとり、まだそんな年でもない土地を禿頭にするのを見ると、人々は彼を勤勉な進取の気性に富んだ市民とみなすのである。」(RP, 157)「近代産業社会の要請する分割原理、つまり労働と怠け者(無為)、経済的な有用性と無用性」<sup>125</sup>によって正常と異常の区別がなされるとすれば、無為を実践した Thoreau はさしづめ異常者、エクセントリック、アウトサイダーと称されるのが関の山であろう。しかし「無為こそ最も実りのある仕事」(191)と信ずる詩人にとって、人間を経済的に区別することなど無意味であり、むしろアウトサイダーの視点を維持し続けてリアリティーに至ろうとする。こうした Thoreau の道が正しかったのは歴史の証明するところであろう。

語り手にとって森は湖と同様神聖な場所であった。彼は馴染みの松林、杉林に出かける一方で、この近隣には珍しい種類の樹木を訪ねるのが好きであった。それらには黒カバノキ、黄カバノキ、ブナ、シナノキ、ツノギ、ニセニレノキなどが含まれるが、彼が訪れた森は temple, Valhalla, pagoda, shrines と形容される。彼が樹木を高く評価するのは今までにも見てきた通りだが、大地にしっかり根づき、枝や葉を限りなく天に向かって伸ばす、その自らを不断に造りあげてゆく過程は、人間が見ならうべき姿であると常々考えていたのであった。なぜならば往々にして「我々は地面にへばりついている」(Wr, 5: 244)からであり、「我々はもう少し我々自身を高める」(Wr, 5: 244)必要があるからであった。作者は“Civil Disobedience”の中で、「植物は自らの本性に従って生きることができなければ死んでしまうが、人間とて同じことなのである」(RP, 81)と述べているように、樹木にならってたえず自らを完成してゆく努力を怠ってはならぬのであり、自らの本性(神性)

にそむくことは、すなわち生ける屍と同然なのである。

“Baker Farm”の第2節で語り手は名状し難い神秘的境地、換言すればエピファニーを経験する。彼は「虹の弓形の付け根に立ち」(202)、「私は色ある水晶 (crystal) を透して見るような眩惑を感じた。それは虹の光の湖 (a lake of rainbow light) であり、私はつかのま、イルカのようにその中で生きた」(202)と語る。「水晶」や「光の湖」に関しては、前章の最後でウォールデン湖とホワイト湖を形容する時、「ウォールデン湖とホワイト湖は地上の大きな水晶であり、光の湖である」(199)と述べられたばかりであるので、読者はその純粹で神性な雰囲気を保ったまま、いやそれゆえに違和感なく語り手に感情移入することができるのである。Hardingによれば、実際には「虹の弓形の付け根に立つことなど不可能である。なぜならば虹は錯視であり、見る人の真上にいつも現れるからである」<sup>216</sup>ということになるだろうが、虹の弓形の付け根に立つことが可能か不可能かが今問われているのではない。要するに作者がこの短い章の中で「虹 (rainbow)」に4回言及していること自体が重要なのである。では虹は一体いかなる意味をもっているのだろうか。それを解くヒントは *Journal* の中に見出せる。Thoreau は *Journal* の中で虹に関して、「虹は神の顔が微かに現れたものではなからうか」(J, 4: 128), あるいは「宇宙の創造主が人間との契約を承認しているのは明らかである。……人間に印象づけるために構想されたのである。(Designed to impress men) 虹を見る人は皆世界にあてはめられたギリシャ語——*Kosmos*, すなわち美の意義を理解し始める。それは人間に印象づけるために構想されたものであった」(J, 4: 284-285)と述べている。これらの引用からも明確なように、虹はいわば天と地の間にかかる橋である。虹は神が人間に自らの存在、すなわち神性を訴えるためにデザインされたものなのである。それゆえ「湖をのぞき見て自らの心の深さを知る」のと同様、虹を仰ぎ見て、その輝きで自らの汚れた魂を清めなくてはならないのだ。後出の John Field にとっては虹はただの自然現象以外の何の意味ももたず、さしずめ Flint なら自らの湖の上に懸った虹を売りとばせなくて口惜しい思いをしたかもしれない。Wordsworth が「我が心は踊る／虹の空に懸るを見る時」<sup>217</sup>と歌っているように、人は虹を見て想いを馳せなくてはならぬ。少なくとも虹に想いを馳せることが、作者の主張する覚醒への一歩なのであった。語り手が“Higher Laws”の中で、「私の日常生活の真の収穫は、朝な夕なな恵みに幾らか似て、無形で名状し難いものである。それは捕えた小さな星屑であり、今も放さぬ虹のひとつかけら (a segment of the rainbow) である」(216-217)と述べる時、彼の心と魂はどこまでも神性に近いものであったのである。なお「イルカのように生きた」というそのイルカは、「永遠、不滅性の象徴」<sup>218</sup>である。虹はその束の間の自然現象というよりは、一度虹を見た人の心に神の属性がいつまでも輝き続ける、極めて倫理的な側面をもっている。たとえ一瞬でも人間的時間の中で神を見たことが、語り手にとっていかなる体験にましても貴重なことであった。

語り手が体験したもう一つの体験も虹の体験とよく似たものである。彼は自らの影の周りに後光 (halo) を見て、「自分が選ばれた者の一人」(202)であることを確認する。このような体験はイタリア人の彫刻家 Benvenuto Celleni によってもなされていることを補足して、神から守られている人々は光栄であると確信する。「虹」と「後光」の神秘的体験を通して、彼は自らの生き方が間違っていないことに自信を深め、自らの生き方を語り続けてゆくことを決意するのである。

そうした中、語り手は“Baker Farm”の後半部分において自ら実践する「より高い靈妙な生活」と全く相反する、いわば“Economy”で徹底的に問われた「静かなる絶望の生活」の典型を John Field という農夫に見出し、それを読者に披露する。このような二立対極的な生き方は *Walden* を通して繰り返され、読者には既に馴染みのものであるが、この対立の落差こそ作者が読者に用意した覚醒の手段の一つなのであった。語り手は John Field との出会いを雨が激しく降り、その上稲妻の光る場面にセットする。雷についても作者は巧妙に *Walden* 中にちりばめている。雷も虹と同

様天と地を結び付けるものであるが、虹が神の穏やかな顔とすれば、雷は神の怒りの顔なのである。“Solitude”において語り手は雷に打たれてできたヤニマツの木の溝が何年か後に一層広がっているのを知って、「畏れにうたれた」(133)と述べている。そもそも雷は人を目覚めさせ、神に対する畏敬の念を呼び起すものなのであった。

John Fieldは近所の農家のために開墾の仕事を請け負っているアイルランド出身の、妻子ある男である。正直で勤勉なところは評価できるとしても、語り手には無意味な生活を送っているように思われた。彼は“Economy”の中で繰り返し警告された「誤った生活」を実践している典型的な人物で、語り手はコンコードに住むこのような誤った生き方の実例を取り上げる必要をひしひしと感じていたに違いなかったのである。“Visitors”で述べたように、森の中には樵のAlek Therienが住んでいた。彼は作者と同年齢、独身、その上森の中で自然と調和して生きているという人物だったので、作者の共感を少なからず得ていた。もっともそれには一定の条件があつたことで、このTherienにしても知的限界は無視できず、簡素な生活と高き想いが完全に結びつかなくて最終的な評価につながらなかったことは既に見ての通りである。一方John Fieldは結婚し子供もいるとはいえ、Therienのような野性味にも乏しく、経済的にも知的にも誤った目覚めぬ生活に日々埋没して暮しているのだった。

ウォールデンの洞察者である語り手は自らの簡素な生活と、「虚ろな人間」の代表であるJohn Fieldの誤謬の生活とを比較する。彼はJohn Fieldに対して自らの衣食住を説明してやる。明るく清潔な家に住み、その費用はJohn Fieldの一年間の家賃程度である。茶やコーヒーは飲まず、バターやミルクや新しい肉も取らず、質素な身形みなりをしているが、「内的な豊かさは外的な貧しさに比例する」(J, 3:114-115)を信条としているので、その高き想いは物で拘束されることはありえない。これに対しJohn Fieldは「初めにお茶だのコーヒーだのバターだの牛肉だのというから、そういうものの代のために激しく働かなければならず、激しく働いてしまうと身体の消耗を補うためにまたたくさん食わなければならない」(205)悪循環を繰り返している。

Thoreauはしばしば「手段と目的」について自らの著作の中で言及しているが、このことで思い出すのは大学の卒業式の時に表明した“The Commercial Spirit of Modern Times”である。この中で彼は「自らの本性に忠実に、精神的愛情を培い、人間らしい独立した生活をしようではないか。富を生活の手段としても、目的とはしないように努めようではないか」(EEM,117,傍点筆者)と語り、高貴な目的がいかなる手段よりも優先すると説いた。John Fieldの場合、まず物欲が優先して労働がそれに続き、思考の入る余地は全くなかった。彼は物質的欲望が唯一の尺度である世界に埋没していた。彼は多くの嗜好品を毎日食べられるのはアメリカに移住して来たおかげであると言ってはばからないが、これがJohn Fieldの「アメリカの夢」だとすれば、彼の人生は何と無味乾燥なものではなだろうか。語り手は簡素の哲学を捨て、いや持とうとはせず、徐々に支配的になりつつあるアメリカ流の物質優先の生活に染まり始めたJohn Fieldを見て落胆を感じないわけにはゆかなかつた——「悲しいかな！アイルランド人の教化は、一種の道徳的開墾用耙を以て企てられるべき事業だ。」(205-206)彼の生き方は「盲目航海」(206)に等しく、希望の港に着けるものかどうか疑わしく、情なくなるのであった。「悲しいかな、John Fieldは計算を立てずして生活し、かくして失敗に陥るのだ。」(206)更にJohn Fieldの井戸を見た語り手は「悲しいかな、そこに浅瀬があり、流砂があり、綱も切れていて桶は沈んでいたのだった」(207)と「悲しいかな(alas)」を連発せざるをえない作者の心境は、怒りを越えた諦めに近いものが感じられるが、もちろん「私は万やむをえないかぎりには諦めを用いることは欲しなかつた」(91)のである。語り手に与えられた使命は、いかなる絶望的状况においても高らかに自らの生き方を歌い続けることにあつた。「人間は意識的な努力によって自らの生活を高めることができる」(90)と信じていたので、必

ずいつの日か人は目覚め、彼の話に耳を傾けてくれることを念じていたのだった。語り手は John Field との会話の中で自らのアメリカ観を披露する。「唯一真のアメリカとは、そのようなもの〔茶、コーヒーなど〕なしですませるような生活方法を人々が自由に採用でき、そのようなものを用いることで直接間接に生じる奴隷制度や戦争、その他の無駄な出費を支持するように国家が強制することのない国なのである。……世界中の牧草地が荒地 (wild) のままに残され、そのことが人間が、自らを救済 (redeem themselves) し始めたことの結果であれば、私はむしろ嬉しいのだ。人間は自己の教化のために何が最善であるかを見出すために歴史を学ぶことを要しないであろう。」(205) 何ものにも束縛されない自由な国アメリカに対する彼の赤裸々な感情を告白したこの一節が、皮肉にも彼の信念とは逆の道を歩み続けてきたアメリカの現状をそのまま反映している。それゆえに、人間の解放と尊厳を主題とする *Walden* が書かれるべくして書かれるに至ったのだった。上記の引用の中で語り手が引用した「歴史」はもちろん文明化の歴史である。しかし彼は人間の救済のためにはこの文明化の歴史ではなく、自然の歴史に目を向けるように訴える。「若き日に汝の造り主を覚えよ」(207) とよく知られた聖書の一節を語ることにより、五官が新鮮で純粋なうちに「自然の影響」(*PJ*, 3: 323) を受けることが自らの救いの第一歩であること強調する。またここで自然の野生が人間を救うと述べていること、及び「自らの本性に従い生い茂れ (Grow wild according to thy nature.)」(207) と wild を強調したことは、*Walden* の中でも重要な一章である次章 “Higher Laws” との関連性からいっても重要な意味を帯び始める。ただ一口に自然と人間精神の対応関係 (correspondence) というが、自然の wildness と人間性の wildness をうまく統一調和させる哲学が見出せるであろうか。この問題は、作者の、ひいては語り手の悩ましいディレンマを孕みながら、“Sounds” あたりから垣間見られ始め、“Higher Laws” でその頂点に達するが、その余韻は “Spring” の最後まで続き、統一と調和をモットーとする *Walden* の中で完全には解決が計られなかった問題の一つであった。

語り手が John Field に暇乞いをする時、雨は止み、東の森の上に出た「虹」は晴れた夕方を約束していた。はたして John Field にはこの「虹」が見えたであろうか。確かに自然現象としての虹の存在には気がついたのであろうが、彼には色と形しか見えず、覚醒の希望としての虹、内なる虹は見えなかったと思われる。語り手は入日で赤みがかった西に向かって肩ごしに虹を見ながら丘を降りていると、守護神の言葉が聞えてくるように思われたのだった。

毎日、できるだけ遠く広く魚を捕り猟をするがよい——もっと遠く広く——そして悪びれずに多くの小川の縁や炉のわきで休憩するがよい。若き日に汝の造り主を覚えよ。夜明けにはもはやもの想いをさらりと捨てて起き、冒険を求めよ。昼には新しい湖のほとりにあれ、そして夕べには至る所を我家としてくつろげ。この世にはこの野ほど広い野はなく、ここでの遊びほど価値ある遊びはない。お前の天性に従って、とてもイギリス牧草にはなれない、菅や羊歯のごとく思いのままに生い茂れ。雷をして鳴りとどろかしめよ。それが農夫等の収穫をほろぼす恐れであろうと何であろう？ 彼等が車や小舎に逃げる時、お前は雲の下に雨宿りをせよ。生計を得ることをお前の職業とせず、遊びとせよ。大地を楽しめ、けれどもそれを所有するな。進取の精神と信念との不足から、人々は売ったり買ったりし、自分達の生涯を農奴のように費やしつつ、現今の位置に留まっているのだ。(207-208)

語り手は守護神の言葉としているが、ここで表明された主張は彼自身が “Economy” から “Baker Farm” まで一貫して述べてきたものであることは明白であり、自然の中の生がいかに充実したものであるか再度強調したのであった。この中で「遠く広く魚を捕り猟をする」は「全体的な人間」

に達する前段階として語り手が薦めるものの一つで、次章で詳しく紹介されることになる。上記の引用で最も重要なのは、最後に言及された「現今の位置 (men are where they are)」である。この語句は“The Village”の一節「自分の位置と無限の関係を知る (realize where we are and the infinite extent of our relations)」(171)を容易に思い出させる。語り手は「静かなる絶望の生活」を脱して「より高い生活」に向うため多くの示唆を与えるが、最終的に *Walden* の最大の主題ともいえる自己認識 (self-awareness) とか自己発見 (self-discovery) とは、錯綜する諸関係の中で自己の位置を見極め、そこを出発点としてより高い存在へ変身することに他ならなかった。

日が暮れると人々は仕事場から「おとなしく (tamely)」(208) 帰途に就く。ここで使われた tamely は wild との対照で読まれるべきで、“Walking”で主張されたのはあらゆる tameness に対する wildness の魅力であった。語り手も自らの日課である散歩から家路を急ぐ。「我々は毎日新しい体験と性格 (character) とをもって、遠くから冒険と危険と発見とから帰宅すべきである」(208) と語り、常に覚醒を追い求めてやまぬ姿勢を一貫して維持する。ここでも character という語が使用されているのは注目に値しよう。*Walden* 中何回となく使用された character の真の意味は「性格」という曖昧模糊とした内容ではなく、むしろ「道徳的に優れた品性、特性——Moral qualities strongly developed or strikingly displayed; distinct or distinguished character; character worth speaking of (OED)」という意味なのである。character の最高の状態が言うまでもなく divine であり、語り手が一貫して主張し続けてきたのは、不断に自己完成を試み、この「徳性」を身につけることではなかっただろうか。この意味で作者が *Walden* の中で最大かつ最終の目標としているものが人間性の涵養や「人間精神の教化」<sup>129</sup>ということになり、自己発見を通じての人間性の向上、すなわち精神的メタモフォーシスであることが再認識させられる。

“Baker Farm”の最後の一節で、語り手は John Field を再度登場させる。彼は気がかわったのか、沼地を掘り返すことをやめてフェアハイブンを釣りに来たのであった。語り手は John Field の釣りの様子を皮肉たっぷり次のように語る。「私には相当の漁があったのに、彼は僅か二三尾を追い回している始末だった。彼はそれが自分の運命だと言った。ところがボートの中の二人の位置を換えてみたが、運の方も位置を取換えてしまった。」(208) この一節の意味は、単に運のあるなしに拘らずもっと本質的なものが John Field に欠けていることを暗示する。John Field は自らの置かれた位置を認識できないまま「盲目的航海」を続けている。せつかく森の中という理想的な環境にいながら、語り手が強く訴え続けてきた自然と自己との関係の修復を計る努力は一切せず、ただ時代の趨勢に我身を順応させ、「より低い法則」に執着するだけの人間である。確かにアイルランド移民という苦難の過去や貧しい現状は割り引いて考えなくてはならないが、それでも「John Field はこの原始的に新しい国で、何か昔ながらの古い国のやり方で生きようと思っている」(208) 有様なのである。アメリカは真に新しい人々を歓迎する新世界である。語り手が“Economy”を初めとして口をすっぱくして説明してきたのは、変身の可能性探求ではなかったか。それを思うと、John Field の生き方は本質的に誤っているのであった。

彼はいずれ「先住者」の一人としての意味しかない存在となるのであろう。「気の毒な John Field よ——私は彼がこの書を読むとは思わないが、読むのならそれによって啓発されるがよい……彼の足の踵に翼でもはえるように」(208-209) という語り手の切なる願いがこめられて本章は終わるのであるが、この思わずもれ出た啓発の願望——一つの道徳観——こそ作者が *Walden* を書くとした主目的であった。この意味で確かに本章は“The Ponds”と“Higher Laws”という極めて重要な二章には含まれた章であるが、それがただちに「ユーモラスな幕間劇」<sup>120</sup>になるとは到底考えられず、むしろ作者が一度は実験生活の候補地として選んだベーカー農場、その美しさは本章中に三度引用された Ellery Channing の“Baker Farm”の詩からも想像できるのだが、そのよう

な人間の救済にとって理想的な場所で、しかも虹の輝く下に住む John Field が、“Economy”で徹底的に糾弾された目覚めぬ人物の典型であったことに対する作者の無念さ、やるせなさなのである。

## 註

1. Joseph R. McElrath, Jr., *Cliffs Notes on Walden* (Lincoln: Cliffs Notes, Inc., 1971), p.47.
2. Richard Tuerk, *Central Still: Circle and Sphere in Thoreau's Prose* (Hague: Mouton & Co., 1975), p.80.
3. “Images of Circularity in Thoreau's Prose”, p.256.
4. “Walden Pond as a Symbol”, p.292.
5. Mary Garcar Bernath, “Substance and Process in Thoreau's Universe” (Ph.D. dissertation, University of Pittsburgh, 1974), pp.71-72
6. “Reflections in Walden Pond: Thoreau's Optics”, p.72.
7. *Ibid.*, p.75.
8. 『シンボリズム』, pp.137-138.
9. 『自然と自我の原風景(上)』, p.11.
10. *Ibid.*, p.117.
11. *The Magic Circle of Walden*, p.223.
12. 『ヘンリー・デイヴィッド・ソーロウ——ある反骨作家の生涯』, pp.135-136.
13. 『シンボリズム』, p.67.
14. *Henry Thoreau: A Life of the Mind*, p.332.
15. 中村雄二郎『術語集』(岩波新書, 1984), p.24.
16. *The Variorum Walden*, p.299.
17. *Poetical Works*, p.62.
18. *Cliffs Notes on Walden*, p.53.
19. Reginald L. Cook, *Passage to Walden* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1949), p.xv.
20. Stephen Adams and Donald Ross, Jr., *Revising Mythologies: The Composition of Thoreau's Major Works* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1988), p.184.

(平成3年9月30日受理)

(平成3年12月27日発行)

